女子新國語讀本

新制版

卷七

375.9
Om15
資料室

42474

教科書文庫

4
810
42-1941
20000
35852

資料室
375.7
Om15

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一 共編

女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟
昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

法隆寺全景　（第十四課參照）

編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一 國民精神の體得―これに就いては、國體の精華・國民の美風・偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二 文學精神の涵養―これに就いては國文學の本質に基づき、時に於ては古今・形に於ては樣式の種々相に亙り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三 國語精神の把握―これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木枝増一
澤瀉久孝

ぼうの木に ぼうの花さく
河畔の子 なかめる
白秋

目次　卷七

一　我が國體　黑板勝美　一
二　日本女性の歌　北原白秋　三
三　人間の聲　高村光太郎　一四
四　心と言葉　和辻哲郎　二一
五　詩興　夏目漱石　二六
六　高瀨舟　森鷗外　二六
七　俳人蕪村　正岡子規　五〇
八　俳句抄（近世下）　五九
九　雅文抄　六三
一〇　一茶文抄　小林一茶　七三
一一　重盛諫言　平家物語　八四
一二　平家の末路　高山樗牛　九五
一三　綠の雨　鏑木清方　一〇四
一四　斑鳩の宮　三木露風　一一〇
一五　落花の雪　太平記　一一四
一六　自然思慕　齋藤清衛　一二〇
一七　近世短歌抄　一二九
一八　源信僧都の母　今昔物語　一三五
一九　妹に與ふ　吉田松陰　一四三
二〇　景岳・雲濱・闇齋　平泉澄　一五三
二一　國民性　文部省　一六一

附錄
裝束・甲冑・武具圖鑑
日本文學年表

……終……

廣島大學圖書之印

黑板勝美
長崎縣の人、國史學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治七年(一八七四)生。

准后
北畠親房
吉野朝の忠臣、顯家等の父、學者、政治家、正平九年(一三五四)薨、年六十三。

神皇正統記
北畠親房の著、神代より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を述べたもの、延元四年(一九九)著作。

女子新國語讀本 新制版 卷七

一 我が國體

黑板勝美

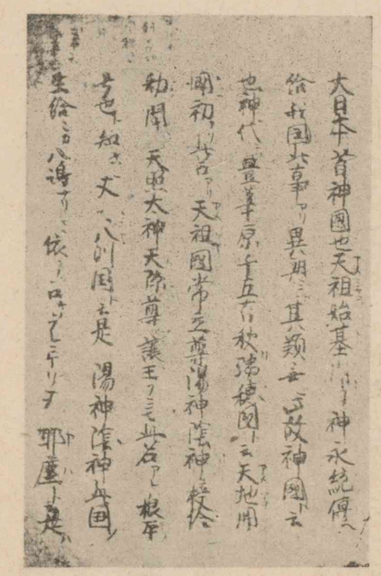
准后(じゅんこう)北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこの事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」

とある通り、天照大神以來、萬世一系の天皇を上に戴いてゐる我が大日本帝國が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮がある事は、我が日本に生まれたものの誰しも心に思

神話
傳說

ひ、口にしてゐるところである。けれども、さてどうして、我が日本が神の國として今日まで數千年の間傳はつて來たか、尙將來も、この數千年間傳はつて來た言ふべからざる力を以て進んで行くか、といふ事は、肇國以來の歷史を味はひ、さうして、こゝに皇室と國民との關係を知り、それに依つて、我が國體がいかに自然に發達して來たかを知らなければ、了解することはできないのである。さうして、その歷史の中には神話或は傳說が見えてゐるが、その



神皇正統記（白山本）

社會的集團

起原を尋ね、その發達して來た途をたどつて見れば、その神話・傳說が、萬世一系なる歷史的事實を基礎として起つてゐることが認められる。

之に就いての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふ事を、地理的にも、生活狀態の上からも考へねばならぬ。その關係が我が日本にはいかに現れてゐるか、いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。

まづ、我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との

生存競爭
依存する
原始的
高天原
神代の昔、天孫降臨以前、我が大和民族の在住した地の稱、天照大神のしろしめした御國で、その所在については種々說がある。
日高見國
大祓祠に初出の語「四方ノ國中ト大倭日高見ノ國ヲ安國ト定メテ」とある、大和國の美稱。
細胞

接觸がよほど遲れる。隨つて、その社會には、生存競爭といふ事よりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分が、より多く現れたであらうとおもはれる。まだ原始的の社會であつて、たゞ自分等の目に觸れる範圍が、世界の全體であると考へて居つた時代に於ては、もし我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山もしくは海で圍まれた高天原、又は日高見國といふものであつたとすれば、その狹い小さな世界で、一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、かの强者が弱者を苦しめる樣な意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げる事に進んで行かなければ、その社會は滅亡となるのである。この事は、社會の一つの細胞ともいふべき家庭の組織に就いても考へ得る事である。隨つて、家庭の組

近親結婚

織せられる本となつてゐる夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐた事は、神話傳說の中によく現れてゐる。さういふ風で出來た家庭は、夫婦・親子の關係は極めて親密であつて、隨つて、平和な愛を以て結ばれた社會が茲に成立つて來た事を信じ得る色々な條件が、日本の社會の發達の上に備つてゐるのである。

さて、この平和な社會のだん〳〵發達する具合を見ると、一番初には、別に專門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それがだんだん進んで來た時に於て、その社會の成立、その國民生活に必要な精神的や物質的の分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうして、その家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱とする事に進んで行つたも

中臣　天兒屋根命より出た氏族の名、神と君との中をとりもち和げる祭祀を職とする意味からつけられた。

齋部　天太玉命より出た氏族の名、身心を忌み清めて、祭に仕へ祭器を造るを職とする意味からつけられた。

物部　可美眞手命より出た氏族の名、「もののふ」の部、即ち軍事にたづさはる者どもとの意味からつけられた。

氏族制度

主權者

ので、中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱そのものがそれぞれ一つの家の名前となつたといへよう。この場合に、それがまた國家的組織と一致してゐるのが、即ちまた我が國上古の氏族制度であるが、職業に關係なく國家の最高地位を占められる家であるから、別に家の名稱の必要はなく、たゞ尊稱だけがあればよろしい。今も、お上とか、上樣とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事である樣に、大昔から我が皇室には御家名といふものがない。尤も、親王や皇族の御方が別家をなされて、何の宮樣と申すのであるが、それは公式には用ゐられぬ事である。

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於てたゞ我が大日本皇國あるのみである。いかなる國でも、日本

革命

以外の國では、皆主權者の家名がある。これは要するに、もと國民の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつたからである。日本の皇室は、この點に於て、社會發達の最初から主權者として今日まで繼續せられた事を、事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。日本にいづれの時代にか革命が行はれたものとすれば、我が皇室には必ず家の名前がなければならぬはずである。

以上の所說によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根源となつてゐる根本義が了解せられるであらう。さうして、我々がこの肇國の昔に遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は

綿—棉—錦

國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益養成して行かねばならぬ。即ち、歷代天皇は萬世一系を事實に於て永久に傳へる事に御努力があり、我々日本國民はその意味に於て皇室をお助け申すことに於て努力があり、こゝに始めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして、前に述べた日本の最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推擴げたものが、この皇室と國民との關係となつたので、一に歷代天皇が、義は君臣であるが親しみは父子の樣な大御心で國民に君臨せられ、隨つて、神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、お一人の天皇も國民を虐げられたお方がおいでにならぬといふつくしい歷史となつて現れてゐるのである。

武烈天皇　第二十五代、御名は小泊瀬稚鷦鷯尊、紀元一一六六年崩御。

蹟—績

日本書紀　三十卷、天地開闢より持統天皇までの漢文編年體歷史、養老四年（一三二〇）、舍人親王・太安麻呂等、詔を奉じて撰した。

百濟　三韓の一、天智天皇の二年（一三三）に亡ぶ。

末多王　百濟の暴君。

仁德天皇　第十六代。

醍醐天皇　第六十代。

後奈良天皇　第百〇五代、御在位三十二年、弘治三年（一三二七）崩御、御年六十二。

武烈天皇の御事蹟として日本書紀にある物語に、百濟末多王の事蹟が混入してゐる事は、早く學者の定說となつてゐる。仁德天皇が民家の煙を御覽になつての御仁政も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられた御心事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が仁德天皇や醍醐天皇の御聖德の上に現れてゐるので、仁德天皇・醍醐天皇のみが、聖德の天皇であらせられたといふのでない。後奈良天皇は、その日の供御にもお困り遊ばされた程皇室御衰微の時代に於て、なほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられた。

神皇正統記にも、

「窮あるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけたまふ皇になんおはします。」

供御
宸筆
般若心經
經典の名、詳しくは般若波羅蜜多心經、般若（智慧）の必要を簡潔に說いたもの。
日嗣
中核
服膺する
御奉公
扶翼す

といつてあり、また「凡そ、王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。」と述べてあるのは、親房がいかによく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべき信條であらねばならぬ。我々日本臣民は、皇室の爲に身命をさゝげて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を扶翼し奉る事が出來るのである。

皇室の繁榮は同時に日本國の繁榮である。肇國の大精神は實にこゝに存する。そこに始めて天照大神の意味が强く現れて、日本の國運と民福とが進んで來るのである。隨つて、

心醉する

我々は精神的に物質的に向上を圖るため外來文化を攝受するに當つても、終始我が皇室及び國體を中心とすべきであつて、皇室及び國體を忘れ、徒に外來文化に心醉して、國民的自覺を失ふ事があつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は、永劫にこの大信條の下に進まねばならぬのである。

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年（一八五五）生。

創る

潮騷

二　日本女性の歌

北原白秋

一

青空に創られしもの、
日は母よ、
かゞやきぬげに、
かの朝風と
朗けき古代日本。
初あり、この民族の
女性よ、われら、後あり。

二

潮騷と新しきもの、
目も青き、

清明し

幽なる眉

青年日本の歌
北原白秋著、國民歌謠集、昭和七年（一九三二）三月刊行。

地の香の愛、
見よ、島々の
豐なる母體日本。
光あれ、この民族の
女性よ、われら、清明し。

三

今にして美しきもの、
よき婦德、
幽なる眉。
聽け、とどろける
吾が生みの未來日本。
響き合へ、この民族の
女性よ、われら、育てむ。

（青年日本の歌）

高村光太郎
東京市の人、彫刻家、詩人、明治十六年（一八八三）生。

日本橋
東京市日本橋區日本橋通。

トラック
貨物自動車、トロッコもこのなまり。

ハンマー
「鐵鎚」の意、英語。

未來派
二十世紀の初頭イタリイのマリネッティが首唱した藝術運動の一派、運動・速度の美を重んずる、音樂の場合では、樂音内に實生活上の噪音を混入させる。

不協和音

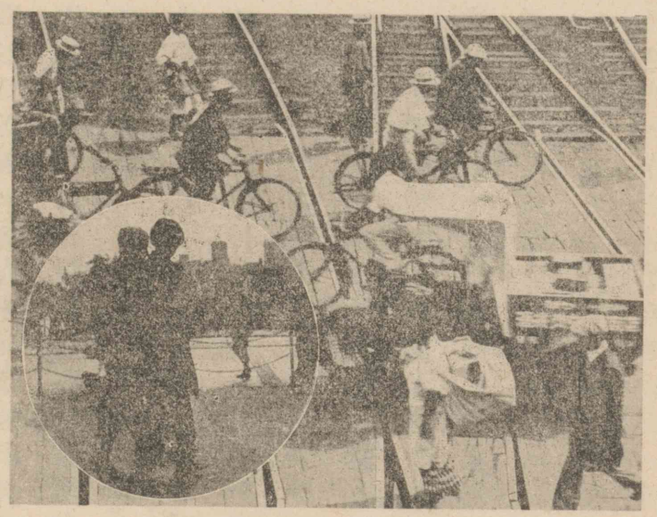
三人間の聲

高村光太郎

街上を行く私の心を一番打つのはやはり人間の聲である。生きた言葉である。人間が不用意に必要に應じて迸出させる聲と言葉とである。

この微妙な生きものを耳に捉へるためのみにも、街路は私にとつて山や海に劣らない魅力を持つ。日本橋あたりの交叉點に立つ。電車とトラックと鐵骨をうつ空氣ハンマーとの未來派的渦流音の中に捲込まれつゝも、漠然と、しかも、確然と涌きあがる群集の聲の不協和音は、何といふ心をそゝる音だらう。全くそれは下手な交響樂のアレグロ・アッサイどころの及ぶところでない。さういふ綜合音の中から、きら〳〵

アレグロ・アッサイ
「最も神速に演奏せよ」との意、又その速度の樂曲名、イタリイ語。



騒音

と生きた言葉がきこえて來る、川瀨に光る小魚の銀の腹のやうに。

そんな大袈裟なのに限らない。ふとした街角の通りすがりに、二人の婦人同志の口から出て、何の話のつゞきか耳にのこして行つた言葉、例へば「……まつたくねえ……」といふやうな一語の、何といふ詩に充ち

思はく
散文的な
語感
通曉する
異國的な

滿ちてゐる事ぞ。それはその言葉によつて話の思はくを想像したり、人物の位置を推察したりするやうな散文的な、餘裕のある聞き方によるのではない。たゞその一語そのものから直接に打つて來る魅力である。これが語感の單位である。この語感の單位を基礎に保持しながら、その上に言葉の意味が加つて來る。

私は、東京で生まれた者の癖として、東京の方言しか知らない。諸國の方言に通曉しないことが又一種の異國的な美を感じさせて、それ等諸國の地方言からそれ〴〵の語感を強く受ける。

この生きた神經はそれだけでも詩の妙致に徹してゐる。生きた言葉を感じ得る力が一つの重要な資格なのである。

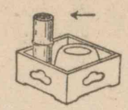
本能的に
的確さ
伏在する
混淆
蒸溜する
三巴

人のしやべる言葉をそのまゝ描出したところで、それは單なる描寫に過ぎない。そのしやべる言葉の中から本能的に生きた言葉の語感を感ずる事から始るのである。其處に無限の深さと的確さとが生まれる。其處に新鮮極まる詩が伏在する。詩人が生きた言葉の語感に何等の傾を持得ないとしたら實に惜しい。詩人が人造した言葉も興味深いものであるが、結局するところ、自然の中に睡る貴重な新しい生きものを起たせて、之に使命を曉らせる方が源が遠く深い。もとより、唯方言を採用するといふことを指してゐるのでないことは自明であらう。

東京人には、江戸から遺つた江戸語と、諸國語混淆から蒸溜された標準語と、刻々に生まれて來る新時代の言葉とが、三巴

洗煉
煉—練
雄辯學
簡勁な
挿話
間接法
直接法
上乘
陰影

になつて働いてゐる。純粹な江戸語は永い間の洗煉によつて實に微妙を極めてゐる。今日それを日常語として眞に純粹に話してゐる人は意外に少い。やはり相當の年配以上の人で、又、特に下町方面の舊式な職業にたづさはつてゐる人の中に見られるやうである。江戸語の話方も性質上二大別される。雄辯學的に完備したものと、極端に無口な、殆ど簡勁なものとである。兩方とも實に鋭敏で魅力がある。江戸人の癖は、挿話を間接法で話さずに多く直接法で話す。だから、上乘の時は、印象が明確で潔白でまるごとに語感が出るし、惡い場合は、却つて話が混亂して騷がしく下劣に墮ちる。今の東京の住人はまづ標準語を標準として話してゐる。可もなく不可もない。意味の明瞭はあるが、陰影にとぼしい。標準語



典謨訓誥

の見本のやうなものはラヂオのアナウンサーの言葉であらう。江戸語が東京語となり、隨つて、明治語・大正語・昭和語となる。言葉の生活は、無限に進化し、表層では飛びはね、深層ではゆるい重い象の歩みをつゞけて、一歩もとゞまらない。

詩は無限なものだから何處からでも生まれる。花園の花からでも、造花屋の花からでも、瓢箪からでも、吐月峰からでも。詩の言葉は原稿紙の罫の間からも生まれるだらう。典謨訓誥からも生まれるだらう。街路に落ちてゐる生きた言葉からは確に生まれる。感ずる心が無ければ言葉は符牒に過ぎない。路傍の瓦礫の中から黄金を拾ひ出すといふよりも、むしろ瓦礫そのものが黄金の假裝であつた事を見破る者は詩人である。又、離れ〴〵になつて活社會の生活のくま〴〵に

有機的に
語格
咄々と
寒暄
同意語
詩の作り方研究
現代詩講座第五卷、詩の作り方に關する諸家の說十七篇を集める、昭和四年(一九二九)十一月刊行。

隱れてゐる特殊語を呼集め、引合はせ、仲よくさせ、一番確な地盤の上に有機的に生活させ得る者は詩人である。語格を自知する觸覺を鍛へて、いたづら好きな自然の生出す有餘る時代語に、百發百中の鋲をうつ者は詩人である。更に又、咄々と口を衝いて出る寒暄の凡語そのものに、創造の喜を知る者は詩人である。

なぜといへば、生きた言葉をつかむ喜は、その事が既に創造の喜に屬し、生きた靈肉の同意語に外ならないからである。人間の在る所、詩は常に澎湃としてゐる。

(詩の作り方研究)

和辻哲郎
兵庫縣の人、哲學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十二年(一八八九)生。
そこばく
いらだたしい
我執
葛藤

四　心と言葉

和辻哲郎

心と心とを觸合はせるには、言葉だけに賴ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異なつた方向に刺戟を受けることは珍しくない。觸合はうとする心は、いつまでも言葉の奧にちゞこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が生みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

心の論理
頭の論理

併し、この不完全な言葉を使つても、心が何のこだはりもなくすなほに向かふへ通ずることもある。時には、その言葉の必要さへない。それが、言葉の上の詳しい説明や了解を必要とする筈の場合においてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることは出來ぬといひきるわけにはゆかない。しかし、また、言葉で説明しさへすれば、心は通ずるものだといひきることも出來ぬ。心が通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲の正しくない事を指摘して、それを改めさせようとする。併し、その行爲の正しくない所以をいかに

承服する
反撥

明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押詰められてゆく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相手の行爲を不正と判斷しても、相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く説破つた所で、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粋に理論の問題を討議する樣なぐあひには決してゆくものではない。

それは、人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することは出來ない。彼が道德的反省によつて自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に頼つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押詰められても、それによつて行爲をあらためる情熱が湧いて來る筈はないのであ

る。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙に強い刺戟を彼に與へるのである。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを說明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

倍音

にじみ（しむ）

妙味

或心の狀態を現す言葉は、複雜な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異なるに隨つて、それ〴〵に異なつた色調や倍音を伴なふ。言葉を通して、その背にある人格がにじみ出し、響き出すのである。心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集積

假託

生活の高さ

キリスト

基督教の開祖、名はイエス、ユダヤ國に生まる、自ら救世主となりて教化につとむ、たまたま教敵のために十字架上に磔殺せらる。（西暦前四―西暦三〇）

偶像再興

和辻哲郎著、論文集、體驗と思索・思索と藝術・藝術と文化の三篇に分かつ、大正七年（一九一八）十二月刊行。

によつては、些も深められるものでない。たゞ正直に、その人の築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虛飾をも許さない。同じ言葉を使つて、同じ樣な心生活を表現しようとするのは各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一である樣に輒くは同一である事が出來ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の內容に或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ること、もしくはそれ以上に深い眞理を語る事は極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかに多い事であらう。併し、まだ何人もキリストの如き力と愛とをその言葉から響き出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奧にひそむ心である。

（偶像再興）

夏目漱石
名は金之助、東京市の人、英文學者、小説家、大正五年（一九一六）歿、年五十。

高じる

寛げる

束の間

五詩興

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、易いところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれ、畫が出來る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐にするがゆゑに尊い。

著想

瑯鏘

丹青

絢爛

靈臺

方寸

澆季

溷濁

尺縑

住みにくい世から、住みにくい煩を引拔いて、有難い世界を眼のあたりに寫すのが詩である、畫である、あるひは音樂と彫刻である。細かにいへば、寫さないでもよい。たゞ眼のあたりに見れば、そこに詩も生まれ、歌も涌く。著想を紙に落さなくとも、瑯鏘の音は胸裏に起る。丹青を畫架に向かつて塗抹しなくとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季・溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。このゆゑに、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくと

夏目漱石

煩惱　解脫する　不同不二　乾坤　羈絆

も、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、また、この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利・私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えない。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしく、絶え間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、ゐたゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴盡くし、鳴明かし、また、鳴暮さねば氣が濟まぬと見える。その上、どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。昇りつめた揚句は、流れ

て雲に入つて漂うてゐる中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は睡くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへも忘れて正體なくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在處が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内で、覺えたところだけ諳誦して見たが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。その二三句の中にはこんなのがある。

シェレー　英國の詩人、西暦一八三年歿、年三十。

萬斛の愁

前を見ては、後を見ては、
物欲しと憧るゝかな、我。
腹からの笑といへど、
苦しみの、そこにあるべし。
美しき極みの歌に、
悲しさの極みの想、籠るとぞ知れ。

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して、我が喜を歌ふわけにはいくまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく「萬斛の愁」などといふ詞がある。詩人になるのも考へ物だ。

暫くは路が平かで、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠

鎭座する
暢氣な

慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣を取られて、踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと、振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎭座してゐる。暢氣なものだ。また考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。苦しみがあるとすれば、足が草臥れて、うまいものが食べられないくらゐのことだらう。

併し、苦しみのないのは何故だらう。たゞこの景色を一幅

料簡

陶冶する

醇乎として

理非を絶する

の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの景色――腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬこの景色が、景色としてだけ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは、人の世につきものだ、余も三十年間それを仕通して飽き〳〵した。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶し

菊ヲ採ル

陶淵明の詩、「飲酒二十首の一。

南山

終南山のこと、支那陝西省西安の南にある。

た小説は少からう。どこまでも世間を出ることが出來ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、さういふものを材料としてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈歩いて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

嬉しいことに、東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。

菊ヲ採ル、東籬ノ下、
悠然トシテ南山ヲ見ル。

たゞそれきりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向かふに隣の人が覗いてゐる譯でもなけ

超然と出世間的に

獨リ幽篁ノ王維の詩、「竹里館」。

扁舟

桃源

王維

字は摩詰、支那唐代の詩人、畫家、乾元二年（西暦七五九）歿、年六十一。

淵明

姓は陶、淵明はその名、後、潛と改めた、支那東晉時代の人、詩人、元嘉四年（西暦四二七）歿、年六十三。

れば、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨リ幽篁ノ裏ニ坐シ、琴ヲ彈ジテ復長嘯ス。深林人知ラズ、明月來リテ相照ラス。

只二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐる。この乾坤の功德は、小說や脚本の功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、總べてを忘却してぐつすりと寢込むやうな功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しいことに、今の詩を作る人も、詩を讀

布教する

ファウスト

ゲーテ作、各部五幕にて二部よりなる詩劇、ファウストが長い遍歷と努力の結果、人生の意義と宇宙の眞理を發見するといふ筋。

ハムレット

シェイクスピア作、五幕の悲劇、デンマークの王子ハムレットが父王の亡靈によつて父を殺害したものが叔父の現王と知り、煩悶・懷疑・逡巡の結果、遂に復讐をとげるといふ筋。

非人情

逍遙する

醉興

漱石全集

十三卷、漱石の全著作を集める、大正六年（一九一七）十二月―大正八年六月、別冊一卷、大正十四年七月刊行。

む人も、みんな西洋人にかぶれてゐるから、わざ〳〵暢氣な扁舟を浮かべてこの桃源に遡るものは無いやうだ。

余はもとより詩人を職業にして居らないから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣めようといふ心掛も何もない。たゞ自分には、斯う言ふ感興が演說會よりも舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりもハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて、たゞ一人繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそ〳〵あるくのも、全くこれがためである。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願、一つの醉興である。

（漱石全集第二卷）

森鷗外
名は林太郎、醫學博士、文學博士、陸軍軍醫總監、帝室博物館總長、圖書頭、帝國美術院長、大正十一年（一九二二）歿、年六十一。
白河樂翁侯
松平定信、田安宗武の子、奥州白河（福島縣）の城主、隱居して樂翁と號する、老中として功があつた、文政十二年（一八二九）卒、年七十二。
寛政
光格天皇の御代の年號（一七八九―一八〇一）。
知恩院
京都市東山區にある淨土宗の本山。
高瀬舟
底が扁平で淺水に適する舟。

六高瀬舟

森鷗外

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にもたゞ一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乘込んだ同心羽田庄兵衛は、たゞ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。

さて、牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、此の痩肉の、色の蒼白

高瀬舟

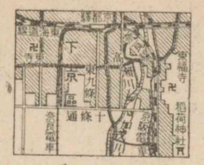
入相の鐘
住所不定
牢屋敷
護送
同心
奉行・所司代・大番頭等の配下に屬し、與力の下に雜務を掌る職。
權勢
賀茂川
鴨川とも書く、京都府愛宕郡雲ケ畑村の北方に發し、下鴨に至つて高瀬

い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして、舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が月の輪廓をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、邊がひつそりとして、たゞ舳に割かれる水のさゝやきを聞くの

川を合し、南流して鳥羽に至り桂川に入る。高瀬川は二條通りの邊より別れて南流し伏見で宇治川に注ぐ運河。



まともに

鼻唄

宰領

みである。

夜舟で寢ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで默つてゐる。其の額は晴れやかで、目には微な輝がある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして、不思議だ、不思議だ、と心の內で繰返してゐる。それは、喜助の顏が縱から見ても横から見てもいかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹始めるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の內に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領を

遊山船

辻褄

したことは幾度だか知れぬ。併し、載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに、此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、其の人の情といふものが全く缺けてゐるほどの、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれぬ。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや〳〵、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衞には、喜助の態度が考へれば考へるほど分からなくなるのである。

暫くして、庄兵衛は怵へ切れなくなつて呼掛けた

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と言つて邊を見まはした喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求めるいひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこで、かう言つた。

「いや、別に譯があつて聽いたのではない。實はな、先刻からお前の島へ往く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分色々な身の上の人だつたが、どれも〳〵島へ往くのを悲しがつて、見送り

に來て一緒に舟に乘る親類の者と夜どほし泣くに極つてゐた。それに、お前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にはしてゐぬやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御深切に仰つしやつて下さつて、有難うございます。なる程、島へ往くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。其の心持は私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、其の結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよし辛い所でも、鬼の栖む所ではございます

鳥目

まい。私はこれまで、どことといつて自分のゐて好い所といふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰つしやつて下さいます。そのゐろと仰つしやる所に落著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難いことでございます。それに私は、こんなにか弱い體ではございますが、つひぞ病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんな辛い仕事をしたとて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに附きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かう言ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。喜助は語を繼いだ。

お足

なんだ（なかつた）

工面

「おはづかしいことを申し上げなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、私の工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それが、お牢にはひつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まぬことを致してゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ます

意表に出る
初老
吝嗇

れば、此の二百文は私が使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐるといふことは、私に取つては、これが始めでございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るか分かりませんが、私は此の二百文を島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」

かう言つて、喜助は口を噤んだ。庄兵衛は「うん、さうかい。」とは言つたが、聽く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も言ふことが出來ずに考へ込んで默つてゐた。

庄兵衛はかねこれ初老に手のとゞく年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために著るものの外、寢卷しか

扶持米
帳尻
五節供
正月七日の人日、三月三日の上巳、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽。
里方
七五三
男子は三歳と五歳、女子は三歳と七歳とに行ふ祝儀、その年の十一月十五日に新衣を着けて產土神に參詣する。
穴を塡める

拵へぬ位にしてゐる。しかし、不幸なことには、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家にかはいがられて育つた癖があるので、夫が滿足するほど手元を引締めて暮して行くことが出來ぬ。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が內證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふことは、所詮夫に知れずにはゐぬ。庄兵衛は五節供だと言つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと言つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はされぬ。格別平和を破るやうなこ

桁が違ふ

とのない羽田の家に、折々波風の起るのはこれが原因である。

庄兵衛は今、喜助の話を聽いて、喜助の身の上を我が身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くして了ふと言つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし、一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄さへ、こつちは無いのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は、こ

口を糊する

出納

つちから察して遣ることが出來る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう〳〵口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢にはひつてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられたやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分が、扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納

意識の閾

係累

が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに滿足を覺えたことは殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し、心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潛んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどが分かると、此の疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體、此の懸隔はどうして生じて來るだらう。たゞ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと言つて了へばそれまでである。併し、それは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處

にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうなことを思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。此のやうに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出來るものやら分からない。それを今目の前で踏止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今更のやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時、庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

（鷗外全集）

鷗外全集
十八卷、鷗外の全著作を集める、大正十二年（一九二三）一月―昭和二年十月刊行。

正岡子規
名は常規、松山市の人、獺祭書屋主人・竹の里人などとも號す、俳人、歌人、明治三十五年(一九〇二)歿、年三十六。

蕪村
谷口氏、與謝氏も稱す、夜半亭等號する、攝津國(大阪府)の人、俳人、畫家、天明三年(一七八三)歿、年六十七。

あたら意匠俗氣

七　俳人蕪村

正岡子規

意匠の美は、文學の根本にして、人を感動せしむるに與つて力あり。然れども用語・句法の美これに伴なはざれば、あたら意匠の美を活動せしめざるのみならず、却つて厭ふべき俗氣を帶びたるが如く感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とは其の意匠を現すに最も適せるものにして、しかも、その創造にかゝるもの多し。

漢語は蕪村の喜んで用ひたる所にして、種々の便利ありしに因るべけれど、その國語より簡單なりしに因らずんばあらず。複雜なる意匠を十數字の中に含めんには、簡單なるものを用ふるの必要あり。

閣

三井寺
園城寺のこと、滋賀縣大津市にある、天台宗寺門派總本山、朱鳥元年(一六八六)の創建。

座右

賣卜先生

成語

閣に坐して遠き蛙を聞く夜かな

三井寺や日は午に逼る若楓

されど、濫りに漢語を用ひて、爲に一句の調和を缺かば佳句とは言ひ難し。

國語もて言得ざるにはあらねど、漢語を用ひて勢を強くしたる方、善く其の意匠を現すべき場合あり。

五月雨や大河を前に家二軒

絶頂の城たのもしき若葉かな

漢語を用ひていかめしくしたる句、

蚊遣してまゐらす僧の座右かな

賣卜先生木の下闇の訪はれ顔

又、支那の成語を用ひたるが爲に興あるもの、又成語を其の

行き〳〵て
「行々重ネテ行々、君ト生別離。」（漢の古詩）

易水
支那河北省にあつて白河に合する川、昔秦の始皇帝を刺さうとした荆軻が燕の太子丹と別れた處、「風蕭々トシテ易水寒シ。」（史記）

薫風
ともし
嚴島
廣島縣佐伯郡にある島、日本三景の一、市杵島姫を祭神とする官幣中社嚴島神社が鎮座せられる。

まゝならでは用ひるべからざるものあり。支那の人名・地名を用ひ、支那の古事・風景等を詠ずる場合は勿論、我が國の事にも引合に出されたるもの少からず。

行き〳〵てこゝに行き行く夏野かな

易水にねぶか流るゝ寒さかな

右の他に、

春水や四條五條の橋の下

の句の如く、「春の水」ともあるべきを「橋の下」と同調となることを避けしものあり。又、

薫風やともしたてかねつ嚴島

の如く、「風薫る」といひては「薫る」の意強きに過ぎて句を成し難ければ、「薫風」と續けて一種の風の名と爲したるものあり。

延寶
靈元天皇の御代。（一六七三―一六八〇）

天和
同右。（一六八一―一六八四）

其角
榎本氏、晋其角・寶井其角などともいふ、近江國（滋賀縣）の人、芭蕉の門人、江戸座を起す、寶永四年（一七〇七）歿、年四十七。

命婦
たぶ
大高
今年米

元祿の頃
東山天皇の御代、（一六八八―一七〇三）松尾芭蕉・近松門左衛門・井原西鶴等出でて、平民文學の"隆盛"となつた時代

俗俳句

古語も亦蕪村の好んで用ひたる所なり。漢語は延寶・天和の間、其角一派が用ひて終に其の調和を得ずして終りしもの、蕪村に至りて始めて成功を得たり。古語は元祿の頃、蕉門の人々が其の調和を試みて、已に成功したる所、今は蕪村に因りて更に一歩を進められたり。

命婦より牡丹餅たばす彼岸かな

大高に君しろしめせ今年米

俗語の最俗なるものを用ひ始めたるも亦蕪村なり。元祿の頃は雅語・俗語相半ばせし俳句も、享保以後、無學無識の徒に翫弄せらるゝに至つて、雅語漸くその姿を消し、俗語益用ひられ、意匠の野卑と相俟つて遂に俗俳句となり了れり。されど、其の俗語たるや、雅語を解せざるが爲に用ひたるものにして、

享保　中御門天皇の御代。（一三七六―一三九六）

談林派　延寶・天和（前頁參照）の頃に流行した俳諧の流派、大阪の西山宗因を主唱者とし、斬新奇拔の趣向を輕妙な口語で自在にいひ表すのを特色としたが、蕉風が興つて、遂に衰へた。

淤泥　佶屈なり

冗漫なり

獨歩

貞享　靈元天皇の御代。（一三四四―一三四八）

寶曆　桃園天皇の御代。（一四一一―一四二四）

そは俗語中の古に近きものなり。日常の話語に至りては固より用ひざりしのみならず、之を俗として排斥したり。談林派の作者すら、なほこの俗語中の俗語を用ひたるものを見ず。然るに、之を使ひたる蕪村の句は、これが爲に俗に陷りしことなく、却つて腐草螢と化し、淤泥蓮を生ずるの趣あるを見ては、誰か其の伎倆に驚かざらん。

出る杭を打たうとしたりや柳かな

化けさうな傘かす寺の時雨かな

蕪村は佶屈なり易き漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なり易き古語も冗漫ならしめざりき。野卑なり易き俗語も野卑ならしめざりき。實に用語の一點に於ても獨歩の人なり。

俳句の句法は貞享・元祿に定まりて、享保・寶曆を經て少しも

鬼貫　平泉氏、又上島氏、名は治房、攝津國（兵庫縣）伊丹の人、俳人、元文三年（一三九八）歿、年七十八。

しのゝめ

陽炎

背戸

動かず。たゞ時に談林派及び鬼貫等の奇を弄するあるのみ。然るに、蕪村は句法の上に種々の工夫を試み、或は漢詩的に、或は古文的に、先人の未だ口にせざりし所を吟ぜり。

春風や堤長うして家遠し

菜の花や月は東に日は西に

しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

の如きは、漢詩・漢文より來りし句法なり。

陽炎や名も知らぬ蟲の白き飛ぶ

橋なくて日暮れんとする春の水

春の水背戸に田つくらんとぞ思ふ

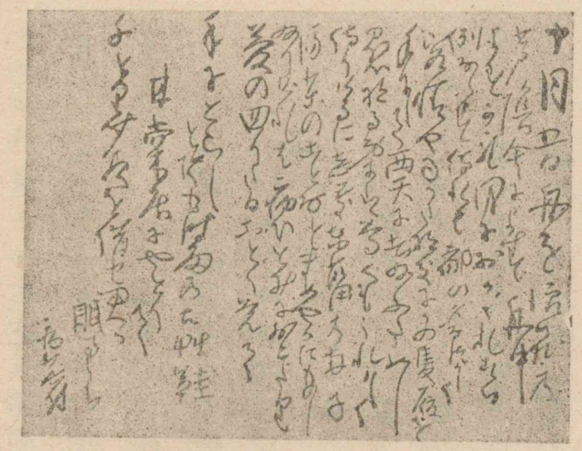
の如きは、古文・和歌より來りしものなり。その他

忍冬

十月五日、舟を浪花の芦陰合によす、舟中よすがら風おかされ、こゝ例ならず侍れば、都の夕なつかしく、客情やるかたなきに、かの隻手にして西天を去給ふ愚なる身には尊くもうれしく侍りけるに、志慶、東菖の雨子、湯薬のこゝ、まめやかなどもの給りければ、病ひとみにおこたり、夢の回りたるごとく覺て、手にとらじとても時雨の古艸鞋甘棠居にやどりて千どり閨夜を借せ君が眠るうち

病蕪村

手燭夜寒



蕪村筆蹟

蚊の聲す忍冬の花の散るたびに

水かれ〳〵夢かあらぬか蕎麥か否か

の如きあり。

修飾語は句を活動せしめ、かつ印象を明瞭ならしむるに效多し。蕪村は巧みに之を用ひて、少しも句勢にたるみを生ぜず。殊に中七音の中にこれを用ふることに長じたり。

手燭して善き蒲團出す夜寒かな

眞結び

大井

大井川、靜岡縣、駿河と遠江との境を走る川、赤石山脈に發源し、駿河灣に入る、流程一二〇粁。

豆爾波

眞結びの足袋はしたなき給仕かな

蕪村の句は堅く締りて搖るがぬが其の特色なり。故に簡勁の語多く、冗漫の語少し。然るに、彼に一つの癖あり。

つゝじ咲きて石うつしたる嬉しさよ

顏白き子のうれしさよ枕蚊帳

五月雨の大井越えたるかしこさよ

の如き是なり。「さよ」といはずば感情を現す能はざる時にのみ用ひたる蕪村の句は、固より此の語を無造作に置きたるにあらず。更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」といふ豆爾波を用ひたる事なり。

畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

時鳥平安城をすぢかひに

廣庭の牡丹や天の一方に
庵の月あるじを問へば芋掘りに
狐火や髑髏に雨のたまる夜に

常人をして此の句法に倣はしめば必ずや失敗に終らん。豆爾波の結尾を以て一句を操るもの、蕪村の蕪村たる所以なり。

蓋し蕪村は複雑なる意匠を短詩形に盛るには含蓄多き漢語を常用し、或は古語を用ひ、或は俗語をも驅りて、以て敍事詩形を精細にせり。宜なり、その句の趣味識ひろく、詩的寫象の複雑精緻に、その調の緊縮して勁健味の多きことは。

（俳人蕪村）に據る）

狐火

俳人蕪村
正岡子規著、俳諧叢書第二編、主として蕪村の俳句の特質を論じたもの、明治三十二年（一八九九）十二月刊行。

八 俳句抄（近世下）

春の海ひねもすのたり〳〵かな　谷口蕪村

日歸りの兀山越ゆる暑さかな　同

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　同

蕭條として石に日の入る枯野かな　同

やぶ入のねるや一人の親の側　炭太祇

玄關にて御傘と申す時雨かな　同

磯山や小松が中を春の水　高井几董

涼しさや花屋が店の秋の草　同

谷口蕪村
五〇頁參照。

兀山
鳥羽殿
京都市伏見區鳥羽にあつた離宮、白河天皇の御造營、鳥羽天皇御增修。

蕭條と
炭太祇
山城國（京都府）の人、俳人、明和八年（一七七一）歿、年六十三。

やぶ入
高井几董
山城國（京都府）の人、蕪村の門人、寛政元年（一七八九）歿、年四十九。

三井寺　園城寺のこと、大津市にある、天台宗寺門派總本山。
久村曉臺　加藤氏ともいふ、尾張國（愛知縣）の人、俳人、寛政四年（一七九二）歿、年六十一。
三浦樗良　志摩國（三重縣）の人、俳人、安永九年（一七八〇）歿、年五十二。
高桑闌更　加賀國（石川縣）の人、名は忠保、寛政十年（一七九八）歿、俳人、年七十三。
冬籠史記　一三〇卷、漢の司馬遷の著、黄帝から漢の武帝までの事を記した歴史書。
かひわり菜　加舍白雄　信濃國（長野縣）の人、俳人、寛政三年（一七九一）歿、年五十三。

日暮れたり三井寺下る春の人　久村曉臺
茫々と芒折れ伏す秋の水　同
すかし見て星に淋しき柳かな　三浦樗良
櫻ちる日さへ夕となりにけり　同
枯蘆の日に〳〵折れて流れけり　高桑闌更
冬籠史記よむ程は米もあり　同
うつくしや春は白魚かひわり菜　加舍白雄
木鋏の白刄に蜂の怒かな　同
五月雨やある夜ひそかに松の月
馬借りてかはるがはるに霞みけり　同

大魯　吉分氏、德島藩士、安永七年（一七七八）歿、享年五十位。
黒柳召波　春泥舍といふ、山城國（京都府）の人、蕪村の門人、明和八年（一七七一）歿、享年未詳。
天瓜粉　冬木立
水麥　樗庵と號す、金澤の人、俳人、天明三年（一七八三）歿、年六十六。
やれ衣がへ　建部巢兆　秋香庵と號す、武藏國（東京府）の人、文化十一年（一八一四）歿、享年不詳。
井上士朗　枇杷園と號す、名古屋の人、醫家、文化九年（一八一二）歿、年七十一。
夏目成美　隨齋と號す、江戸の人、札差業、俳人、文化十三年（一八一六）歿、年六十八。

足袋脫いで小石振るふや堇草　釋大魯
ともし火に凍れる筆を焦しけり　同
子の顏に秋風白し天瓜粉　黒柳召波
郊外に酒屋の倉や冬木立　同
よわ〳〵と日のゆきとゞく枯野かな　堀麥水
夕顏や物をかり合ふ壁のやれ　同
山寺や蜂にさゝれて衣がへ　建部巢兆
大蟻の疊をありく暑さかな　井上士朗
撫子のふしぶしにさす夕日かな　夏目成美

櫻

伴蒿蹊
名は資芳、蒿蹊はその號、また閑田子とも號する、近江國（滋賀縣）の人、國學者、文化三年（一八〇六）歿、年七十四。

ほりす
外國
おづ
契

九雅文抄

伴蒿蹊

閑田廬の花

おのれ若かりしより珍しき境に遊ぶことをほりせしも、老の齡に添へて、外國の水草清きも、山幽なる斧の響も、ほと〳〵にうとくのみなりまさりぬ。かくては、遂に嵐山の花、伏見江の月にも歩み苦しくやなりなんとさへ思ひおぢて、いかで勞なくて慰むよすがをも得ましとたばかるに、この庵はもとより見知りたるが、契ありけるかも、をとどしの秋なんあがものになりて、荒れたる所々つくろひ、庭に池掘りては月を浮かべ、燈籠据ゑては木がくれのたよりとしなど、何ばかりの事にはあらねど折ふしのよしあるべくしなしつ。

ひたやごもり

長嘯の翁

木下長嘯子、名は勝俊、豐臣秀吉の妻北政所の兄、左近衛中將、小濱城主、歌人、慶安三年(一六五〇)卒、年八十一。

けに

閑田文草

五卷、伴蒿蹊の文集。

橘千蔭

一三一頁參照。

そぼふる

さきのあるじ情ありて、疾きも遲きもいとあまた櫻植ゑならべて、松にまじへたるが、春ごとにこの前ゆきかひて羨しかりしも、我がものとなりにしからに、去年の春もひたやごもりにて、彼の長嘯の翁の「年經たる宿の櫻の思はんに散らずば外の花も尋ねじ」とのたまひしも身に知られぬるが、あまりに花の頃の早くて散りにし後の春の日數、いと口惜しうおぼえし、をことしは春立つ日の遲かりしけに、此の月の限は花見んと思ふもたのし。

（「閑田文草」に據る）

秋雨

橘千蔭

葉月廿日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとりの庵に行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧立渡る曙のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日

なん殊にあはれは深かりける。もとよりかや葺ける庵なれば、音だに無くて軒の雫のみつよつおちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるがほろ〳〵と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮かびかつ消ゆる水泡にこそ雨のけはひはしるかりけれ。うち向かふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、そのひま〳〵より長き堤の見えわたるに、堤の遠なる梢はやう〳〵に薄墨もてかき消ちたらんが如くいとしも遙けきは、たゞなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川たが墨がきのすさびなるらん

（「うけらが花」に據る）

かつ

かき消つ

うけらが花
七卷、橘千蔭の歌文集、享和二年（一八〇二）刊行。

村田春海
一三一頁參照。

遠の御門

露霜
立田姫
さるは
くれ

御手染

琴後集
十五卷、歌文集、春海の歌後その女たせ子が清水濱臣等の補助を得て撰定したもの、文化七年（一八一〇）刊行。

伴蒿蹊におくる書

村田春海

秋の日數も殘りすくなうなり侍りにたるを、都の御住まひよ、いかに明かし暮し給ふぞ。この遠の御門は、大方に山いと遙にて、露霜の心おそき習に侍れば、立田姫のすさびもはかばかしうも侍らずなん。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵にそみ給はぬあたりは、何の山里、くれの古寺、御心ゆく方ぞ多かりなん。「都人いづれの山の錦をか詞の色にたぐへては見る」此のごろは御手染のめづらかならんこそおほからめ。風の便を忘れ給はで示し給はば、下照蔭にともなはれ侍らんこゝちせんはうれしきわざなるべし。立つ霧にな隔て給ひそ。

（琴後集）

松平定信　三六頁參照。
かぶろ
祕閣
干潟
かさ
洗ひものす
そず

筆

松平定信

「この筆はいとわろし。三度四度ものすれば、皆かぶろのやうになりぬ。」とて、とみに物書くをりは、墨もすらで硯の水をかいまはし、書果つれば投置くにぞ、硯や祕閣のはざまなどに横たはりて、いつかさきもつりばりのやうになりて、かわきにかわきたるを、また惜しげなくたてざまに、干潟のあたりにて音いづるばかりにかいまはしあるは齒もて嚙碎き、又は墨もて筆のさきをおしひしぎて書きつ。かくてはいかで命の長かるべき。よき筆をばまづかさとるもしづめてし、物書いたるあとにても洗ひものし、紙におしあて、又はすかし見て、一筋も亂さじとして置くめり、いとゞ命の長かるべきことわりなり。早くそじなんと思ふをば、いとあら〳〵しくなして「これ

花月草紙　六卷、松平定信老後の隨筆。
清水濱臣　一三三頁參照。
擣衣
しきる
たゆむ
泊酒舍集　八卷、清水濱臣の歌文集。
石川雅望　通稱五郎兵衛、六樹園と號す、江戸の人、旅館を業とす、狂歌・狂文作者、國學者、天保元年（一八三〇）歿、年七十八。
津の國　攝津國、現在大阪府の西北部及び兵庫縣の東南部。

な見給へ。三度四度にはやかくなりし。」といふもをかし。

（花月草紙）

擣衣を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の音の雁がねにかよふにやあらん。あなあやし〳〵。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか。皆あらず。聞く者の心のわびしきなり。（泊酒舍集）

すなほなる修行者

石川雅望

修行者、國々をめぐりありきて、津の國なる山路にかゝりけるに、酒うる軒のはしらに人をくゝりて置きたり。ぬす人をとらへてころさんとするにや。出家の身のつれなく見すぐ

すべうもあらず、たすけてみばやとおもひて、酒うる家に入りて仔細を問へば、あるじ「あのやつは旅人にて侍り。今ほどわが家の酒をかひのみて、味そこねて饐けありといひ侍り。我が家いかで饐けあるものをうらん。さるあらぬことをいひて、人にもふれしらすべきものと思ひて、とらへくゝりおきて侍り。」といふ。修行者「うりものをわろしといへるに、はらだたせたまへること道理あり。されどいみじき罪にもあらざれば、今は老法師にまげてゆるしたまはなん。さてその酒、いかなる味かして侍りし。われ試みん。」といへば、あるじまがりに汲みて出すを、修行者とりてひとくち飲みけるが、目もまゆも一つにしゞめて、まがりをうちすて、みづから後様に手をまはして「いざ、われをもくゝりたまへかし。」とぞいひける。すなほ

饐け

まがり

しみのすみか物語
二卷、雅望の輯錄した奇談・異聞集、天保二年(一八三一)刊行。
上田秋成
一三三頁參照。

追ひしく

御格子

立ちさうどく

しらまなご

ともの宮つこ

水陰草
水を被つた草。

る修行者にぞありける。

（しみのすみか物語）

村雨

上田秋成

みな月立ちぬれば、峰なす雲の夕ごとにたつも崩るゝも、天にます何れの神のたくみならん。蟬なく木かげのやどりに汗をぬぐひ、岩間の清水を掬びてあかぬ人の行きつかるゝ樣なるに、風さと吹きくる後より、黑き雲の追ひしきて降來る村雨は、瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに「御格子おろせ、簾よ。」など、立ちさうどきつゝ見たまへれば、大庭のしらまなごは、忽ち淺川の瀨に流れあひて、殿守のともの宮つこら、こゝかしこの御垣のくまぐまに這ひかくるゝなど、いとめざましな。落ちたぎつ瀨の、水上には知らぬ濁の巖を越え、岸を崩しつゝ、水嵩まさると見しも、唯片時に流れ落ちて、水陰草の露重げに

藤簍冊子（つづらふみ）
六卷、上田秋成の歌文・紀行集、文化四年（一八〇七）刊行。

石原正明
尾張（愛知縣）の人、國學者、文政四年（一八二一）歿、年六十二。

いさよふ月
年々隨筆
六卷、石原正明の隨筆集、享和元年（一八〇一）より文化二年（一八〇五）までの間に刊行。

中島廣足
通稱太郎、櫪園と號す、熊本の人、國學者、元治元年（一八六四）歿、年七十三。

草引結ぶ

なえふし靡きあひたる、けさよりの暑さわすれ、夕なりけり。

（藤簍冊子）

ゆふべやまさりたらむ　石原正明

ゆふべやまさりたらむ。村雨などりなく晴れ、風いと涼しうて、山の端の雲いと白うわざとならずところどころに懸れるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむ、にほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峰の松原濃きみどりなるに、茜の色燃ゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

（年々隨筆）

驛　中島廣足

治れる世は、驛路のゆきかひもにぎはゝしく、人宿す家はた建て續けて、草引結ぶ思もなきものから、さすがにうちとけて

枕上

まし

まかなひありく

櫪園文集
三卷、中島廣足の隨筆集、櫪園歌集、櫪園長歌集と共に櫪園集をなす。

しも寢られぬは、旅路の習なるべし。曉の鐘はいづこも同じ響にて、いとゝとく立出づる旅籠馬のこゑ〳〵、枕上に聞えて心地よげなるに「今日は天氣もよかんなり。何がしの浦の眺い、かにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは。」などいひつゝ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寢たる旅人なるべし。宿なる人々も起出でて、朝食のことなどとかくまかなひありく程、やう〳〵物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引寄せつゝ「馬まゐりて候。」といふは、吾が乘るべきにやと思ふもいとをかし。

（櫪園文集）

小林一茶
通稱彌太郎、俳諧寺と號す、信濃國（長野縣）柏原の人、俳人、文政十年（一八二七）歿、年六十五。

普甲寺
昔、京都府與謝郡の普甲山にあつたといふ寺。

淨土
さゞめく

丁々と

衆苦

一〇一　茶文抄

小林一茶

一

昔、丹後の國普甲寺といふ處に、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は世間、祝をしてさゞめけば、我もせんとて、大晦日の夜、一人使ふ小法師に手紙認め渡して、翌の曉にしかじかせよといひ教へて、本堂へ泊りにやりぬ。小法師は、元日の旦、未だ隅々は小暗きに、初鷄の聲と同じくがばと起きて、教の如く表門を丁々と叩けば、内より「いづこより。」と問ふ時、「西方彌陀佛より年始の使僧に候。」と答ふるより早く、上人裸足にて、踊り出で門の扉を左右へさつと開き、小法師を上座に請じて、昨日の手紙をとりて、恭しく戴きて讀んで曰く、「それ世界は衆苦充滿

無常

骨頂

厄拂

口上

空々し

おらが春
小林一茶著、文政二年までの自分の周圍の事實及び感想を日記體に記した隨筆及び句、一茶の代表的著作、文政一一年（一八二九）成、嘉永五年（一八五二）刊行。

に候間、早くわが國に來るべし。聖衆出迎ひして待入り候。」と讀終りて、おう〳〵と泣かれけるとかや。

この上人自ら工み拵へたる悲しみに、自ら歎きつゝ、初春の淨衣を搾りて、滴る涙を見て祝ふとは、物に狂へるやうながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすと聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。それとは聊か替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝盡くしも、厄拂の口上めきて、空々しく思ふからに、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

（おらが春）

竹植うる日
陰暦五月十三日、この日竹を植ゑると、よく繁茂すといふ、竹醉日。

むづかる

二

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節しげきうき世に生まれたる娘、ものにさとかれと、名を「さと」とよぶ。　ことし、誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵あはゝ、天窓てん〳〵、かぶり〳〵振りながら、同じき子どもの風車といふ物もてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめり〳〵むしるに、「よくした、よくした。」とほむれば、誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。　心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、なかなかに心の皺を伸ばしぬ。　又、人の來りて、「わん〳〵はどこに。」

ゐざり

二十五菩薩
阿彌陀佛の左右に侍する二十五の菩薩。

と言へば犬に指さし、「かあ〳〵は。」と問へば鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺え侍る。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、直ちに小椀投げすて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけ、何時しか、かれをも振分髪のたけになして、踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かまさりて興あるわざならんと、わが身に積る老

おらが春挿繪（一茶自筆）

日たく

衣のうらの玉

法華經に出てゐる。或人友に寶珠を衣の中に入れられたのを知らず、諸國を流浪して貧苦に艱む、後前の友に邂逅して衣の中に寶珠の藏めあるを聞き、忽ち貧苦を免れることが出來たといふ故事。

を忘れて、憂さをなん晴らしける。

かく日すがら、をじかの角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び勞るれば、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃き片づけて、やがて閨に泣聲のするを、目の覺むる相圖と定め、手かしこくも抱起して、乳房あてがへば、すは〳〵と吸ひながら、胸板の邊を打叩きて、にこ〳〵笑ひ顔を作るに、母は、長き胎内の苦しびも、日日の襁褓の穢はしきも打忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、撫でさすりて、一入悅ぶありさまなりけらし。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな　（おらが春）

三

六日

享和元年（一八〇一）五月、一茶はその時に年三十九歳であつた。

物語など始む

一茶の父が物語るのである、父は名を彌五兵衛といひ、柏原にて農を業とした。

安堵す

痩骨

つれなし

宿世の因緣

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思しめさんと、夜著うち疊みて寄懸らせ申したるに、來し方の物語など始め給ひけり。「抑汝は三歳の時母に後れ、やゝ長くるにつけても、後の母との中睦まじからず、日に〳〵魂を痛め、夜々に心の安き時とてはなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくありなん、一度故郷を離れさせんには、はた慕はしき事もやあるべきと、十四歳といふ春、はる〴〵江戸へは赴かせたりき。あはれ、餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには、家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂しむべきに、年はもゆかぬ痩骨に荒奉公せさせ、つれなき親とも思ひつらん。皆これ宿世の因緣と諦めよや。我も一たびは江戸に立越えて汝にめぐり逢ひ、相果つるとも汝が手を借らんと

五逆罪
「父ヲ殺シ、母ヲ殺シ、羅漢ヲ殺シ、和合僧ヲ破リ、佛身ヨリ血ヲ出ス。」（景勝王經潤州疏）

彌太郎
一茶の幼名。

體たらく

思ひしに、こ度はる〳〵歸り來りて、かゝる看病こそ淺からざる緣なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん。」と、はらはらと涙を落し給ふに、我は唯うち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の二入より深き父の恩を、側に附添ふこともなく、唯浮かめる雲の如く、東にあるかと思へば西に漂ひ、光陰は坂の上に輪をころがす如く今年二十五年にもなりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に伏拜み、われ涙を落しなば、病いよ〳〵重らせ給ふべしと、顏おし拭ひてうち笑ひ「さること、心に思ひ給はで、はやく快氣なし給へ。」と藥をすゝめ、「やがて健になり給はば、われ元の彌太郎となり、草刈り土掘りて御心を安んじ參らすべし。今までの體たらく、許

所緣

身後云々
白氏文集に、「身後黃金ヲ堆クシテ北斗ヲ柱フトモ、如カジ生前一杯ノ酒。」とある。

うけがたし
すぐなる

し給へ。」といへば、父は限りなく喜び給ひぬ。

八日晴。田休なればとて、所緣あるも所緣なきも、聞傳へ語り傳へて、訪來る人も多かりき。父が好む物なりとて、酒もて來るもあり、蕎麥粉もて訪ふもあり。父は喜ばしげに頭を擡げ、手を合はせて、ほど〳〵に會釋し給ひき。「身後黃金北斗をさゝふとも、如かじ生前一杯の酒。」と、唐も大和も人の情等しく、亡き後にて佛事供養美々しく盡くしたらんより、存命のうちの和ぐ言葉にはまさらじ。今は世降りて、他の一寸の歪は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず、萬づうしろめたき勝にて、我不幸なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生まれてなよ竹のすぐなる道に入る
よしもがな

子一つ
鶏の空音
「昭王、孟嘗君ヲ釋ス、出デテ函谷關ニ至ル、關ノ法、鶏鳴イテ客ヲ出ス、客ニ鶏鳴ヲ爲ス者アリ、鶏悉ク鳴ク、是ニ於テ關ヲ開イテ之ヲ出ス。」（史記孟嘗君傳）
「夜をこめて鶏の空音はかるともよにあふさかの關はゆるさじ」（清少納言）
入日云々
魯ノ陽公、韓ト難ヲ搏フ、戰酣ニシテ方ニ暮ル、戈ヲ挥リテ之ヲ撝ク、日、之ガ爲ニ反ルコト三舍。（淮南子）

この夜は子一つの頃より寢られねば、夜長うおぼし、「いまだ夜は明けぬか、雞は啼かざるか。」と、我に聞き給ふこと三度、四度、七度、九度に及べど、たゞ星明りのみにして、軒のつまの楓の樹かげ、其處彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりなり。あはれ鶏の空音をつくりて、關の戸を開きしためしはあれど、夜の明くるてふは天のなすわざにして、火を袋に入るゝ幻術は知らず、入日を返す勢もあらねば、たゞ燈火をかゝげ寢顔をまもるばかりなり。

十日晴。頻りにありの實をたうべたしとむづかり給へば、このあたりの所縁あるも無きも、親しき限、富みたる家、心當りある門、聞盡くし尋ね探し盡くすといへども、ありの實一つ貯へたる人としもなく、夏さへ寂しき山里なり。今日は藥の絶

善光寺
今、長野市にある、天台・淨土兼宗の名刹、皇極天皇の元年（三四二）創建、柏原より約三一粁。
卯の下刻
牟禮
長野縣上水内郡中郷村大字牟禮。
辰の刻
かうがへの匙
べつかふ製の藥匙
肆

間なれば、善光寺へ往きてみんと、曉に支度して門を出づるに、皐月の空ほの〴〵晴れて、白雪はみ山にあり。青葉隱れの花は春を殘して、種蒔の山人懷かしく、時鳥の三聲二聲もこよなく時得顔なるに、なじかは心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮てふ驛に至る。今は二十四年の昔、われ江戸へ赴きける日、父の見送り給ひし里なれば、川の音、阪の形も仄に心覺えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。急ぎければ、辰の刻ばかりに善光寺に著く。醫師の家はいまだ朝飯頃ほひと見えて、主人の聲も聞えければ、具に病のさまを語りけるに、やがてかうがへの匙取りつゝ、御藥合はせて給ひけり。抑、この地は御佛の淨土にしあれば、蒔は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人出づる人、國々よりはる〴〵歩を運

成佛

雪中に筍を云々

孟宗ノ母筍ヲ嗜ム、冬節將ニ至ラントス、筍尚未ダ生ゼズ、宗竹林ニ入リテ哀歎ス、而ルニ筍之ガ爲ニ出デタリ、以テ母ニ供ス。（呉志）

氷上に魚を

王祥性至孝ナリ、繼母朱氏慈ナラズ、而ルニ祥愈〻恭謹ナリ、父母疾メバ衣ハ帶ヲ解カズ、湯藥ハ必ズ自ラ嘗ム、母嘗テ生魚ヲ欲ス、時ニ天寒ク水凍ル、將ニ氷ヲ剖リ之ヲ求メントス、氷忽チ自ラ解ケ、双鯉躍リ出ヅ。（晉書）

びて、未來成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御藥づかひ、はたありの實をさがしに來つるなれば、この役濟まさざらんうちはと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも、ありの實一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして驅けめぐるに、悲しさは、片割一つありともいふ人もなし。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、皇天我を捨て給ふや、佛神我を見限り給ふや。一世ばかりの不幸にはあらじ、父はさぞありの實を待ちて居給はん、このまゝに歸りて父を何と慰めん、と思へば、胸塞がり、落つる涙は大道を潤すに、往き來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ靜めける。此地に無き物いづちにあらん。唯一足も早く戻りて、藥を進め奉

吉田　上水内郡吉田村、現在は長野市に屬する。

八つ

高田　今の新潟縣高田市、柏原より約八十粁。

みとり日記　小林一茶著、享和元年（一八〇一）父のチブスにかゝつた折の看護日記、「父の終焉日記」とも呼ばれてゐる。

らんと、手を空しく吉田てふ里に來れるに、樹立の山鴉三つ四つ五つ、我を見ては聲たつるに、何となく父の身の上の心にかかり、息もつきあへず足を早めし程に、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつよりも顏うるはしく笑を含み給ふにも、ありの實の事を語らば、又やけしきを損ひ給はん、とやせんかくやせん、とためらふに、父の問聞き給へば、ありのまゝを答ふ。高田に往きて求め來り參らすべしと、白雲のよすがもなき根無し言いひて父を宥め奉るは、本意なき夕なりけり。

（みとり日記）

巻末附錄參照

重盛　平氏、清盛の長子、治承三年（八三九）薨、年四十二。
太政入道　平清盛。
せむ
中門の廊
貞能　姓は平氏、家貞の子。
保元　保元元年。（一八一六）
平右馬助　清盛の叔父忠正。
新院　崇德上皇。
一の宮　崇德上皇の長子、重仁親王。

二 重盛諫言

太政入道は、かやうに人々數多縛めおいても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黑糸縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめて、先年安藝守たりし時、神拜の次に靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜られたりける銀の蛭卷した る小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇挾み、中門の廊へぞ出でられける。その氣色大方ゆゝしうぞ見えし。

貞能を召す。

筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋縅の鎧著て、御前に畏つて候。やゝあつて入道宣ひけるは、「貞能、このことといかが思ふ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方へ參

刑部卿　清盛の父忠盛。
故院　鳥羽法皇。
平治元年　紀元一八一九年。
院　後白河法皇。
內　二條天皇。
經宗　權大納言藤原經宗。
惟方　檢非使別當藤原惟方。
成親　藤原氏。
西光　俗名藤原師光。
法皇　後白河法皇。
御結構つ

りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましましかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先を懸けたりき。これ一つの奉公なり。次に、平治元年十二月、信賴・義朝が院・內を取り奉り大內にたてこもり、天下くらやみとなりしに、入道身を捨てて兇徒を追落し、經宗・惟方を召縛めしに至るまで、既に君の御爲に命を失はんとすること度々におよぶ。たとひ人何と申すとも、七代までは此の一門をばいかでか捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光といふ下賤の不當人めが申すことにつかせ給ひて、この一門を滅さるべき由、法皇の御結構こそ遺恨の次第なれ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも

鳥羽の北殿　京都の南方にある。（五九頁參照）
北面の輩
著背長
小松殿　重盛の邸、東山にあつた。
法住寺　今の京都市下京區、三十三間堂の東にあつた。
禪門　清盛をさす。

益あるまじ。世を鎭めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移し奉るか、然らずば、これへまれ御幸をなしまゐらせんとおもふは如何に。其の儀ならば、北面の輩、箭をも一つ射んずらん。侍共にその用意せよと觸るべし。大方は、入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著背長取出せ。」とぞ宣ひける。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて、「世は既にかう候。」と、申しければ、大臣聞きもあへず、「あゝはや、成親卿が首を刎ねられたるな。」と宣へば、「さは候はねども、入道殿御著背長召され候。侍どもも皆打立つて法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候。法皇をば鳥羽殿へ押籠め參らせうと候が、內々は鎭西の方へ流し參らせんと擬せられ候。」と申せば、大臣、いかでかさることあるべきと思へども、今朝の禪門の氣色、さるもの狂はし

西八條　清盛の別邸のある所。
卿相雲客
受領衛府諸司
そばさやめくへうす
五戒　殺生戒・偸盜戒・邪淫戒・妄語戒・飲酒戒。
五常　仁・義・禮・智・信。

きこともあるらんとて、車を飛ばして、西八條へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の內へさし入りて見給へば、入道腹卷を著給ふ上は、一門の卿相・雲客數十人、各色々の直垂に思ひ思ひの鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領・衛府・諸司などは、緣にゐこぼれ、庭にもひしと並居たり。旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶を固め、甲の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。入道伏目になつて、「あはれ、例の內府が世をへうする樣に振舞ふ。大きに諫めばや。」とこそ思はれけれども、流石子ながらも、內には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て

面はゆし
素絹
宗盛
平氏、壽永四年（一八四五）殺、年三十九。

對はんこと、面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、素絹の衣を腹卷の上にあわてぎに著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ〳〵ぞし給ひける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道も宣ひ出さず、大臣も申しいださるゝ事もなし。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「成親卿が謀叛は事の數にもあらず。一向法皇の御結構にて在しけるぞや。世を鎭めんほど、法皇を鳥羽の北殿へ遷し奉るか、然らずば、これへまれ、御幸をなし參らせんと思ふは如何に。」と宣へば、大臣聞きもあへず、はら〳〵とぞ泣かれける。

入道、「いかに〳〵。」とあきれ給ふ。大臣涙を抑へて申されけ

邊地
粟散
天兒屋根命
神皇產靈尊の子、藤原氏の祖、天照大神に臣事し、天孫降臨の時に隨從した。
解脫幢相の法衣

るは、「この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣、更に現とも覺え候はず。流石我が朝は邊地粟散の境と申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中、御出家の御身なり。それ、三世の諸佛解脫幢相の法衣を脫ぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ弓箭を

破戒

四恩

普天の下

普天ノ下王土ニ非ザルナク、率土ノ濱王臣ニ非ザルナシ。（詩經）

潁川の水に耳を洗ひ

許由を指す。

首陽山に薇を折り

伯夷・叔齊を指す。

蓮府

槐門

進止

帶しましまさんこと、内には既に破戒・無慙の罪を招くのみならず、外には又仁・義・禮・智・信の法にも背き候ひなんず。旁恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきに非ず。まづ世に四恩あり。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土にあらずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背きがたき禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才・愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。しかのみならず、國郡半ば過ぎて一門の所領となり、田園悉く一家の進止たり。これ稀代の朝恩に非ずや。今此れ等の莫大の御恩を思し召し忘れて、亂りがはしく、法皇を傾け參らせ給はんこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背き給ひ候ひなんず。日本はこれ神國なり。神は非禮を受け給はず。

傍若無人

聖德太子

一一〇頁參照。

十七箇條御憲法

一一二頁參照。

人皆心あり

人皆心有リ、心各執有リ、彼是ナレバ則チ我非ニ、我是ナレバ則チ彼非ニ、我必ズ聖ヲ非トセバ、彼必ズ愚ヲ非トス、共ニ是レ凡夫ノミ、是非ノ理、誰カ能ク定ムベキ、相共ニ賢愚、鐶ノ端ナキガ如シ、是ヲ以テ彼ノ人瞋ルト雖モ還タ我ガ失ヲ恐ル。（十七ケ條憲法第十）

然れば、君の思し召し立つところ、道理半ばなきに非ず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭むる事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條の御憲法に、『人皆心あり。心各〻執あり。彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。鐶の如くして端なし。爰を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。』とこそ見えて候へ。然れども、御運盡きざるによつて、御謀叛已に露れぬ。その上、仰せ合はせらるゝ成親卿を召しおかれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候

所當
冥慮
しかしながら
一入・再入

べき。所當の罪科行はれん上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預り、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思し召しなほすことなどか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎別く方なし。道理と僻事を並べんに、いかでか道理に附かざるべき。之は君の御理にて候へば、叶はざらん迄も院の御所法住寺殿を守護し參らせ候べし。その故は、重盛叙爵より今大臣の大將に至る迄、しかしながら、君の御恩ならずといふ事なし。其の恩の重きことを思へば、千顆・萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入・再入の紅にも過ぎたらん。然れば、院中に參り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代ら

迷廬八萬の頂
須彌山のこと、高さ八萬四千由旬あるといふ、一由旬は古昔、印度で里程を測る單位、種種說があつて一定しない。
蕭何
漢の高祖の功臣。
先蹤

んと契りたる侍ども少々候ふらん。これらを召具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はば、流石以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりも尙高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲に已に不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召されて候へ。院中をも守護し參らすべからず。院參の御供をも仕るべからず。かの蕭何は大功かたへに越えたるによつて官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上に昇ることを許されしかども、叙慮に背くことあれば、高祖重う戒めて深う罪せられにき。かやうの先蹤を思ふにも、富貴といひ、榮華とい

ひ、朝恩といひ、重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきに非ず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷むと見えて候。心細うこそ覺え候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目に遭ひ候重盛が果報のほどこそ拙う候へ。只今侍一人に仰せつけて、御坪の内に引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、易いほどの事でこそ候へ。これ各聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりに涙を流し、かき口説かれければ、一門の人々、心あるも心なきも皆袖をぞ濡らされける。

（平家物語）

卷末附錄參照

高山樗牛　名は林次郎、山形縣の人、文明批評家、文學博士、明治三十五年（一九〇二）歿、年三十二。

南都の餘燼　治承四年（一八〇）十二月、平重衡が奈良東大寺・興福寺を燒いた。

墨股の勝鬪　養和元年（一八一）三月、重衡等、源行家を尾張國墨股に討つて大いにこれを破つた。

信越俄に　養和元年（一八一）平氏は、信濃木曾に起つた源義仲に破られた。

比叡　壽永二年（一八三）七月、義仲延暦寺に據つた。

み吉野の山のあなたに宿もがな身のうき時のかくれ家にせむ。（讀人不知―古今集）

一三　平家の末路

高山樗牛

一　都落

凡そ、世の中に傳へ遺されし歷史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにもまた目覺しきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬪尙響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治・淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野の山のあなたに隱家は無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國のみゆきに御供して、一旦の凌辱を忍ばまし。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限もなう、復

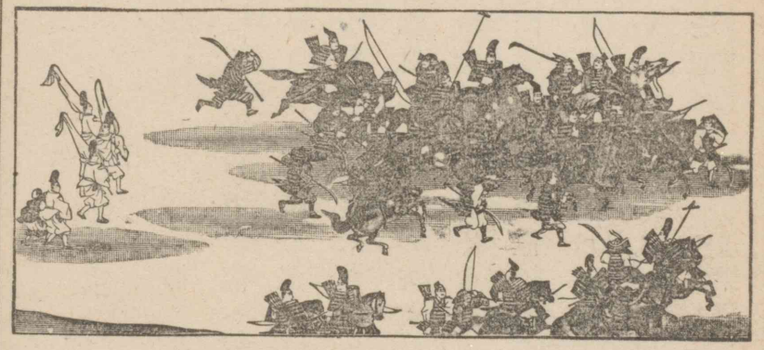
西國
壽永二年（一八四三）七月、平氏、義仲を避けて、西海に走つた。

一炬の煙
炬

鳳闕
椒房

燒野の原と
ふるさとを燒野が原とかへりみて末も煙の浪路をぞ行く。（平經盛―平家物語）

黑金の衣



平家都落（其の一）

かへり來べき都としも思はねばにや、六波羅・池殿・西八條以下一門・譜第の邸宅・宿房、京・白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬるこそ周章しかりしか。

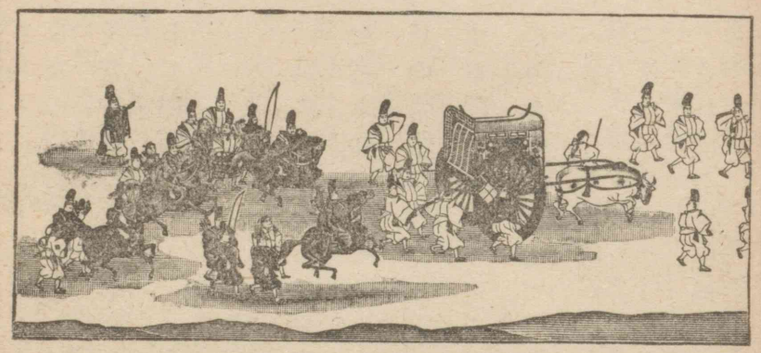
こゝに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、燒野の原と顧みて、末は煙の浪路をば行方も知らずさすらふらん。直衣・束帶の身にも今は黑金の衣を著けたれども、誰かは詠歌の餘哀に

すて難き命や

翠華

東闕

轡



平家都落（其の二）

なれて、弓矢の譽を勵むべき。さても、すて難き命や。今こそは憂世なれ。流石にしのばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向かへば、秋風到る處の野に滿てり。嗚呼、昨日は東闕のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あ

三軍

荒ぶ—荒む

梭をかふ

梭

一題の遺詠に云々　平家都落の折、忠度が京都に引返して俊成の門を叩いて遺した故郷花と題する一首が千載集に選ばれたことを指す。

なたの空とやおぼしけん、日暮(ひぐら)ぶに笛吹く人あり。響は遠く煙波を掠めて、三軍齊しく耳を欹つ。嗚呼、此の時、此の人、想果して如何。

二　清盛入道

世にも哀なるは平家とぞいふめる。げに此の一門の盛衰を考ふれば、心も詞もなか〳〵に及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、今や秋の風の吹荒ばんずる朝も、猶春の夜の夢朧にして、覺めての後は行手をば流石にうき世と觀じても、先世・後代既に梭をかへたるを如何にすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ、かへすがへすも是非なけれ。

されば、こゝに風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、かしこに恩愛にほだされては、おのが身の現在に來世の果報を思はず。哀は桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば奇しきまでに哀なりける運命かな。

恩愛にほだされては云々　維盛が都に留めた妻子を眷戀した事を指す。

權柄　攝籙　成敗　禿童　十善　八幡

石清水八幡宮を申す、祭神は應神天皇・神功皇后・玉依姫、歴代の崇敬厚く、伊勢の神宮と併せて二社宗廟といひ、賀茂神社と併せて三社の名がある、官幣大社。

賀茂

上下の二社がある、賀茂別雷命・玉依姫を祀る、上社は京都市左京區上賀茂、下社は左京區賀茂紙の森にある、官幣大社。

嚴島

五二頁參照。

弓矢のいさをし早畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「此の人ならでは人にあらじ」と唱へられ、三百の禿童は路に往返すれども、京師の長吏これが爲に目を欹つるばかりなり。されば、十善の帝王畏くも外戚の威におされたまひて、八幡・賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が「入る日をも招きかへさむ

射山　藐姑射山の略。

重代の帝座俄に動きて　治承四年（一八四〇）福原遷都を指す。

愛宕の里　百年を四かへりまでにすぎ來にし愛宕の里の荒れやはてなむ。（平家物語）

東關急を傳へて　治承四年（一八四〇）の源頼朝の擧兵。

維盛　重盛の長子、歿年不明。

連錢蘆毛　金覆輪容儀帶佩

富士川　甲斐國（山梨縣）に發して富士の西麓を流れ駿河灣に注ぐ、維盛の潰走はこと養和元年（一八四一）のことである。

算を亂す　北土俄に　平維盛礪並山の敗戰は壽永二年（一八四三）五月のこと。

木曾の山氣　義仲の京都に逼つたのは、壽永二年（一八四三）七月のこと。

兩山の衆徒　南都（興福寺）と北嶺（延暦寺）の僧侶である。

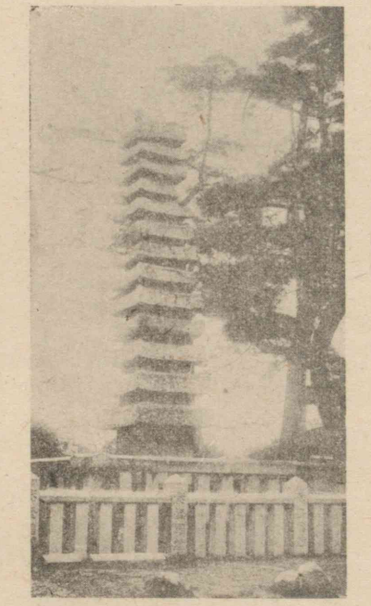
保平　保元・平治兩亂のこと。

ずる勢。」と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげに振舞はれけるこそゆゝしけれ。茲に卿相・雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人。法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐を偲ばせ給ひぬ。中にも、重代の帝座俄に動きて、愛宕の里の哀をとゞめけるこそ、なか〳〵にあさましかりしか。

咲きも殘らず、散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黃匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒に永き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに、北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒亦既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ、病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至る迄、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して、命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨を催しけるぞ。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをし又言ふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱



清盛の塔

乃父

歸依す

六慾煩惱

今は

清盛の薨去は治承五年（養和元年）（一八一）閏二月のこと、享年六十四。

ましことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの、中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發する事無かりしか。否々、あらず。入道こそは死に至る迄其の初念を飜す事あらざりき。彼は正に其の生けるが如くにして死したりき。

今はの詞にいはく、「兵衞佐頼朝が首を見ざりつるこそ返す返すも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事孝養をもすべから

孝養

三世の因果

必す

とまれかくまれ

一我

眇軀

樗牛全集

五卷、高山樗牛の遺文集、明治三十七年（一九〇四）二月―同三十九年（一九〇六）四月刊行。

ず。堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ今生後世の孝養にてはあらんずるぞ。」と。一念の執著に必衰の運命をものともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。其の事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻してその頭にそゝぐとも、彼に於てはなほ此の一我をいかにともすること能はざりしなり。六尺の眇軀、こゝに至れば天地の大にも比ぶべく、運命の如きは、蓋し浮塵にひとしからん。入道こそ、いはゆる死して而して生けるものといふべきか。

（樗牛全集第三卷）

鏑木清方
名は健一、東京市の人、畫家、明治十一年(一八七八)生。

小石川
東京市小石川區。

護國寺
東京市小石川區にある眞言宗の寺、延寶八年(一六八〇)の建立。

目白臺
東京市豐島區目白一帶の丘である。

八重櫻

一三 綠の雨

鏑木清方

若い娘が人妻になつて行くやうに、春の面影は日に〳〵綠の葉蔭の濃い夏の姿に變つてゆく。今日は細雨が屋をめぐる青葉に注いで、青磁に似た初夏の冷たい雨。二三日描きかけになつてゐた今日のやうな綠の雨を主題にした繪を描き上げると、一つの仕事を完成した後に來る小閑氣分で、見晴しのよい北の展望、綠に續く小石川の丘へ眼を走らせる。

雨にぬれた新綠の護國寺の森や、目白臺は眼の覺めるやうに美しい。畫室の下の崖には、からたちの若い葉が淺綠に萌えて、白い淋しい花が貝殼を散らしたやうに咲いてゐるのが見え、ついこの程まで、お姫樣のやうに驕を見せてゐた八重櫻

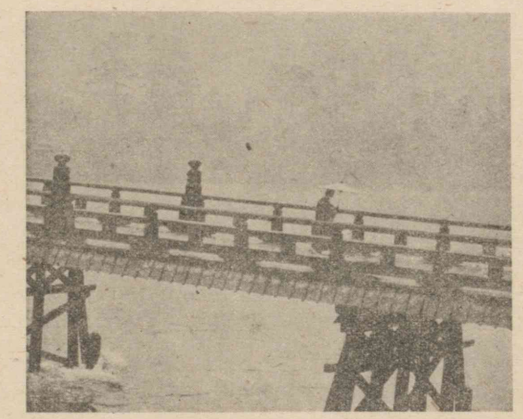
普賢象
八重櫻の一品種、蕊の葉化するもの。

葉櫻

感傷的に

畫心

——普賢象の大きな樹も葉櫻となつて、葉蔭に殘櫻の白けたのをわづかにとゞめてゐるのが、生き〳〵とした周圍の色彩の中にひどく感傷的に眺められる。



綠の雨

藤も牡丹も今が眞盛であらう。暮春から初夏へ移り變るこの頃は、一年中で自然の最も美しい時だ。

繪を描く程の人は、誰でも自然に無關心である事はあるまいが、私のやうに美人畫家と世間からきめられてしまつてゐる者でも、畫心は多くの場合季

畫因

抉出する

魅惑

八つ橋

小川等に幅狹い橋板を數枚、折れ折れに繼ぎ續けて架けたもの。

節の感覺、草木の魅力から誘發される。勿論女性の美が畫因になる事もあるが、私には人體の美だけを捉へて畫にする事は極めて稀だ。私どもから見ると、彫刻は自然に餘り交渉をもたずに、人體の筋や肉の美しさだけを抉出するものであり、油繪でもさういふ態度に出る事が出來るやうだが、一體日本畫には、私に限らず、人體そのものにのみ畫因を置く事は割合に少い。非科學的な日本畫が、組織立つた人體の美を描出するのに不適當だといふ事もあるかも知れないが、私だけの事に就いて言へば、その他に自然から受ける魅惑が餘りに强過ぎると言へよう。今描き上げた繪を例に取つてみてもいゝ。それは八つ橋の上を傘をすぼめて行く女を描いたので、橋の兩側——畫面の左右から柳と實櫻とが雨を帶びて、女を包む

異存

一朶

搖曳する

常套手段

やうに垂れてゐる。水面には雨滴が幾つもの渦を描いてゐる。この繪でも女が中央に置かれ、畫としては中心になつてゐるから、これを主と呼ぶに何の異存もないわけだ。しかし、この畫の畫因になつたのは、譬へば今日のやうな初夏の雨の風情に畫心を誘はれたので、女も風情の一つであるに過ぎない。數日前にはこれと同じやうな畫因から、池に臨んだ藤棚の下を、二十四五くらゐな女が、傘をさして行く畫を描いた。これも女が主か、雨にぬれた一朶の藤の紫が微風に搖曳する風情が主か、作者の畫心は藤の花にあつて、二十過ぎた女を配したのも、その花に對する作者の解釋を語つたまでである。

評家はこれを私の取る常套手段と言ふであらう。風情といふやうな語を使つて、それを畫心の畫因のと言ふのは、何々

似而非宗匠
點取俳諧
掘拔井戸
種切れ
審美的精神
室町時代
足利氏が政權を握り、京都室町に幕府を開いた時代、百八十年間を指す。
禪家好尚

庵などと稱する似而非宗匠の點取俳諧の古さと一樣だと笑はれるかも知れない。だが、風情といふ語の含む內容は、汲んでも盡きない掘拔井戸のやうなもので、何時になつても風情の種切れはなく、時代と共に風情は廣くなつてゆくばかりである。私の解するところによれば、風情とは物象に對する審美的精神を經た感覺の現れで、詩情、畫趣を兼備へた感じを指すものとする。風流といふ語も用ふる事が稀になつた。幕末から明治へかけて餘りに俗に扱はれて、語格の甚だ下つたものの一つだが、風情・風韻などと共に、埃を洗つて今の世に大いに薦めたい。

趣とか味とかいふ事を忘れては、日本の藝術は理解し難い。茶人の言ふわび・さびも室町時代以來禪家の好尚に發して、日

三昧

銀砂子
鏑木清方著、隨筆集、昭和九年(一九三四)五月刊行。

本藝術の高い位置にある觀念だが、この味にほんたうに到著するのは、相當な年配にならなければいけないものだらう。凡そこんなものだとの見當はついても、自らその三昧に入る事は、年ばかり取つてもまだ私などの至れぬところにある。

隣家の庭は、今若楓の茂り盛で、枝いつぱいに擴つた新葉が幾つもの綠の羽團扇を擴げたやうに重なつて、雨を帶び風に搖られてははら〳〵と露を振るふ。

灰色の雲低く垂れ、雨はだん〳〵強くなつて、一帶の綠の岡はまるで銀紗に包まれたやうになつて來た。

（銀砂子）

口繪參照

三木露風
名は操、曾て羅風と號した、兵庫縣の人、詩人、明治二十二年（一八八九）生。

上宮王
上宮皇子のこと、厩戸皇子とも申し、後人は尊んで聖德太子と申した、用明天皇の皇子、推古天皇の皇太子にして攝政、推古天皇の二十九年（六二一）（或は三十年）薨御、御年四十九。

斑鳩の宮
推古天皇の九年、聖德太子の造營せられた宮殿、法隆寺の東院夢殿はその宮址であるといふ。

あとどころ

一四 斑鳩の宮

三木露風

やまとの國
上宮王の
ましましし斑鳩の宮、
青葉して夏は今さかりなり。

古きこのあとどころ、
我は立ち、むかししのべば、

かぎろふ

白き日のかぎろひ照れる中に、
まぼろし青し。

西域

まだ稚き若草の文明日本に、
吹きめぐる西域のかをりは、
やはらかき詩の佛陀を
金色にただよはせぬ。

日出づる處の

「日出づる處の天子、
日沒する處の天子に
書を致す。」と

推古天皇の十五年、太子攝政中、小野妹子を隋に遣はされた時の國書の冒頭の文、この文は隋の歴史に書殘されてゐる。

覺哿　太子の儒教の師、五經博士。

慧慈　太子の佛教の師、高麗の僧、推古天皇の三年（一五五）來朝、二十二年歸國したが、後太子の薨をきいて寂したといふ。

憲法十七條　推古天皇の十二年（一六四）太子の御撰定になつた制法、神・儒・佛の思想を調和し、君臣の道及び諸人の則るべき道德律を示されたもの。

法隆寺　また斑鳩寺（鳩寺）ともいふ、奈良縣生駒郡法隆寺村にある、推古天皇の十五年太子の開基創建になる、法相宗の大本山。

僧伽藍摩　略して僧伽、原梵語、藍・伽藍・僧房・精舍ないふ、僧房などと譯す。

かの太子は宣らす、おごそかに國使をして。
覺哿や慧慈等の聖徒は
衣を飜して來り、
藝術興り、文明すすみ、
憲法十七條、民を導かす。
美しき法隆寺は
千三百餘年の昔に建ちけらし。
嗚呼、巨いなる日本のこころを示す、
僧伽藍摩。

菩薩　原梵語、菩提薩埵の略、覺有情・高士などと譯し、佛道を修行する高德の人をいふ。

青き樹かげ　三木露風著、詩集、大正十一年（一九二二）刊行。

見つつ我が
涙をながす、
東天の菩薩太子、
君がせし功績のあとを。
やまとの國
上宮王の
ましましし斑鳩の宮、
青葉して夏は今さかりなり。

（青き樹かげ）

落花の雪　またや見ん交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙（藤原俊成―古今集）

交野　河内野國郡。（大阪府）北

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。（藤原公任―拾遺集）

嵐の山　右京區嵯峨にある花・紅葉の名所。

思はぬ旅　日野俊基、北條討伐の謀顯れて、元弘元年（一三三一）七月十一日關東へ送られる旅である。

打出の濱　今の大津市松本、石場邊の古名。

駒もとゞろ　貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに。（平兼盛―風雅集）

うねの野に　近江より朝立ちくれば、うねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は。（天歌所御歌―古今集）

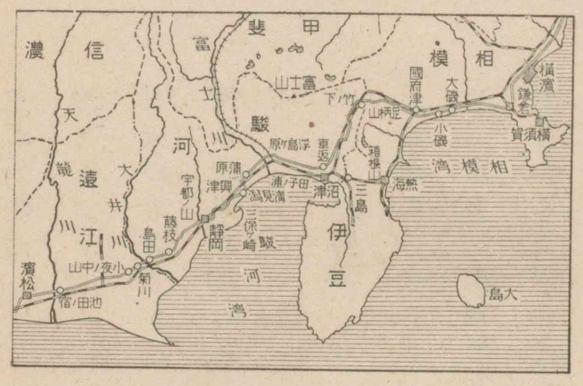
時雨もいたく　白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。（紀貫之―古今集）

鏡の山　鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると。（大友黒主―古今集）

不破の關屋　不破の關人住まぬ屋の板庇荒れにし後はゞ秋の風。（藤原良經―新古今集）

汐干に今や　うちわたす今か汐干になるみ潟とをよる舟の櫂も通はず。（常磐井入道―夫木集）

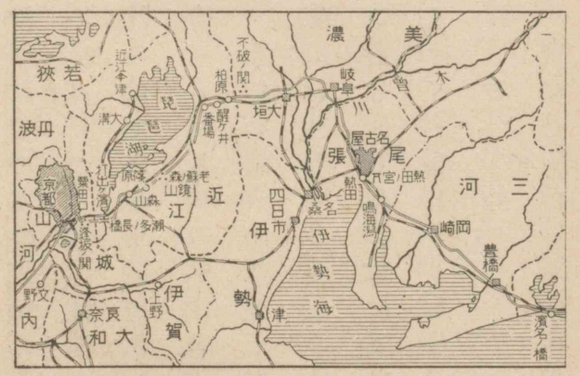
濱名の橋　濱名湖がまだ海に通じない前、湖と海との間にあつた濱名川にかゝつてゐた橋である。



一五　落花の雪

落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、すゑは山路を打出の濱、沖をはるかに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏みならす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖濡れて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとどめて顧みる、故郷を雲や隔つらん。



晩鐘
池田の宿
天龍川の東岸、古は西岸であつた。

匹馬
西行法師
俗名佐藤義清、歌僧、建久元年（一八五）寂、年七十三。
命なりけり
年たけてまたこゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山。（西行法師―新古今集）

亭午

番場・醒が井・柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、晩鐘なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

旅館の燈火幽にして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そこともしらぬ夕暮に、家鄉の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、ふたゝび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙ゆく駒の足早み、日すでに亭午に昇れば、かれひまゐらするほどとて、輿を庭前に舁止む。ながえをたゝきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔南陽縣ノ菊水、
下流ヲ汲ンデ齡ヲ延ブ、
今東海道ノ菊川、
西岸ニ宿ツテ命ヲ終フ。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

承久の合戰
仲恭天皇の承久三年（一八二）後鳥羽上皇が北條氏を滅ぼさうとされた爲に起つた亂。

光親卿
藤原光雅の子、但しこの詩を作つたのは光親でなく、藤原宗行である、宗行は行隆の子、北條氏討伐の謀に與つて、鎌倉に送られ、途中燒津ケ原で殺された。

菊川の宿（東海道名所圖會）

古もかゝるためしをきく川のおなじ流に身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、蔦・楓いとしげりて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方へ下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三保が崎、興津・蒲原うち

亀山殿 今、京都市右京區嵯峨、今の天龍寺境内。

岡べの眞葛 歸り來る程はなけれど朝露の岡べの眞葛うら枯れにけり。（藤原爲家歌集）

業平 在原氏、平安朝の歌人、元慶四年（一八〇）卒、年五十六。

夢にも人に 駿河なる宇都の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。（伊勢物語）

波の關守 清見潟浦風寒き夜な夜なは夢もゆるさぬ波の關守。（院大納言典侍―新後撰集）

過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、しほひや淺き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

（太平記）

上なき思に 富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。（藤原家隆―新古今集）

こゆるぎ 大磯・小磯（こゆるぎ）一帶の海濱を小餘綾の磯といふ。

七月二十六日 後醍醐天皇の元弘元年（一九二）。

太平記 四十卷、著者成立年代未詳、花園天皇から後村上天皇に至る迄、凡そ五十四年間の戰亂を記した軍記物語。

齋藤清衛
山口縣の人、國文學者、前廣島高等師範學校教授、明治二十六年（一八九三）生。

古今和歌集
二十卷、延喜五年紀貫之等が醍醐天皇の延喜五年（一九〇五）撰進した勅撰和歌集、假名序は紀貫之が撰した。

ほの見える

一六 自然思慕

齋藤清衛

わが國土は東海の離れ島で、溫帶に位してゐる上、暖流の影響をうけ、氣候は溫暖であり、風光は明媚であります。五穀豐饒の故に、はやく豐葦原瑞穗の國と稱へられ、多數の民族は安んじて農業にいそしみました。されば、この島國におこる文學が、優美な自然の背景なしに、どうして育ち得ませう。古今和歌集の序を見ると、

花をめで鳥をうらやみ、かすみをあはれび露を悲しぶ心、こと葉多くさまざまになりにける。

と、詩歌の起原を自然愛にありとした考もほの見えてゐます。かゝる思想の生まれるのもうべなるかなで、歌集の何れを手

排列する

文學論
一卷、東京帝國大學に於ける講義を纏めたもの、明治四十年（一九〇七）刊行。

彼地
英國。

憐れ深し

にしても、その半ば以上四季の歌で埋つてゐます。

吾人は上代より習慣性に支配せられて、天地風月を以て文學の大部を構成せらるゝものと信じ、いざ詠歌作文となれば、自己の趣味ありと無きとを問はず、草露・蟲聲・白雲・明月を排列して顧みず。

とは、夏目漱石の「文學論」の中に述べてある言葉であります。なほ、同書に外國人の到底わが民族の自然愛に及ばない例證として、

嘗て彼地にありし頃、雪見に人を誘ひて笑を招きし事あり。月は憐深きものと說いて驚かれたる折もあり。或時は、知人に何故庭中に石を据ゑざるやと問うて、「据ゑてくるゝ人があるとも、直ちに庭外に運び棄てる覺悟なり。」との返答を

時價
磅
英國の貨幣の單位、一磅は九圓七十六錢强。
蘇國
スコットランド、英國北部の地方。
逗留する
諒解する

承つたる事もあり。或時は路傍の杉樹を指して、同行者の時價若干と尋ねたるに、その男五磅位と答へたりし故、日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを、安きものかなと感じたり。あとにて聞けば五磅とは庭樹としての價ならず、材木としての價なりし由。蘇國に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。或日主人と果園を散歩して、樹間の徑路悉く苔蒸せるを看て、よき具合に時代がつきて結構なりと賞めたるに、主人は、近きうちに園丁に申しつけて、この苔を悉く掻拂ふ積りなり、と答へたるを記憶す。

と、わが國人には、如何にも諒解し難い逸話が記されてゐます。

農業本位の國家にとつては、時をたがへない順當の季節ほど最も惠まれうるものはありません。流石に、八百萬神の中

保食神
農業の神、天照大神が月夜見尊を保食神の許に遣はされたところ、保食神は種々の食物を口から出して饗したので、尊は怒つてこれをお殺しになつた、その後保食神の身體の諸部から牛・馬・粟・麥等が生り出たといふ神話がある。
がむしやらに
洸洋と
怒濤狂瀾
茫邈

でも、保食神を尊び、多くの農業神話をもつて居ります。また、改元の理由等にも、自然と關係のあるものが多く見えます。

自然の愛撫は、慈母の愛に異なりません。痛手をうけた子供が、いち早く慈母の膝下に走るやうに、古來の民族は、心にやる瀨なき哀愁を包む時、必ず自然の微笑を求め、自然の發する慰安の言葉に耳を傾けたのでありました。かくて、かれらは優美な自然相を、がむしやらに愛慕しました。誰にでも想像されるやうに、優美さのみが自然のもつ美ではありません。島國だけに、洸洋とした大海の壯美、ことにも怒濤狂瀾の中には形容しがたい美しさがあります。しかし、祖先はそんなものには少しもおかまひなしでした。なほ國土は小なりといへ、高山奇峰の美もあります。茫邈平原の美もあります。なほ

廿一代集　古今和歌集を初とし二十一の和歌集、最後のは新續古今集で、後花園天皇の永享十一年（一四〇九）完成。

尠少

それらは、京洛の地を離れたために詩材にしなかつたといふならば、眼前に自然の趣をかざりながら、多種類の魚は泳ぎ、鳥は飛び、獸は走つてゐます。　しかるに、廿一代集に、鯉の歌、雀の歌、犬の歌を幾首探しもとめることが出來ませうか。　植物を題材とした歌に比して、動物を詠つたものが、いかにも尠少であることには、誰しも不審を抱かざるを得ません。　しかし、その植物といつても、およそ範圍は決定してゐて、いはゆる、梅・櫻・菊・萩などのもののみであります。

折りとらば惜しけくもあるか梅の花いざ宿かりて散るまでは見む

櫻花雨はふりきぬ同じくはぬるとも花の蔭に宿らむ

秋の菊匂ふ限はかざしてむ花より先とちらぬ我が身

能因法師　俗稱橘永愷、平安朝時代の歌僧。

今鏡　一〇卷、大鏡の後を承けて、後一條天皇の萬壽二年（一〇二五）から、高倉天皇の嘉應二年（一一七〇）まで十三代、凡そ百四十年間の列傳體歴史物語、續世繼ともいふ。

增鏡　一〇卷、壽永四年（一一八五）後鳥羽天皇の踐祚から、元弘三年（一三三一）後醍醐天皇の隱岐より還幸まで、十五代百五十年の事蹟を記した編年體の歴史物語。

北山の西園寺殿　京都市右京區、今の金閣の邊か、西園寺公經（きんつね）が元仁元年（一二二四）設けた別莊である。

雨月　西行を題材にした

は

秋萩を折らではすぎじ月くさの花すり衣露にぬるとも

全くかうした心持は、歐米人の理解し難い點かと考へます。かの能因法師が、月の光のめでたさに、わざ〳〵庵の廂を破つて光を入れたとの逸話は、今鏡に見える所であります。　また、增鏡の作者は、北山の西園寺殿の庭園の美を描いて、「まことに涙催しぬべく、心ばせ深き所のさまなり。」とまで評してゐます。　絶景に對して、涙を落さずにゐられなかつた心を思ひみずには居られません。　なほ、謠曲「雨月」を見ますと、西行のたまたま宿りをとつた家の老夫婦が、「姥は元來月に愛で、板間も惜しと軒を葺かず、祖父は秋の村時雨、木の葉を誘ふ嵐までも訪

謠曲、老夫婦は「賤が軒端を葺きぞわづらふ」といふ歌の下の句を得てこれに上の句をつければ宿を貸さうといつたので、西行は「月はもれ雨はたまれとにかくに」とつけたといふ筋。

官能

づれよとて軒端葺く――」と互にいさかふといふ作り話がありますが、いかにも面白い話材ではありませんか。

しかし、この場合細慮を要することは、かゝる自然愛そのものの性質であります。何となれば、國文學に現れた自然描寫は、かなりに、現代稱する自然描寫卽ち月・花・雪などの描出されたものとは相違してゐます。要約すれば、古典に現れた自然描寫は、官能に訴へた所が甚だ稀少であつて、理由なしに自然を愛してゐるらしい。或人が「自然を人

大和繪

大和繪
日本畫の一流派、唐畫に對して日本の風物を取扱つたもの、平安朝時代に始まり多く貴族生活を題材とした。

寫實

自然陶醉

企圖

反問する

はしよる

工化したため色盲となつた」とこれを論定されてゐますが、私は、むしろ自然の盲信だと考へたいのです。私は、かの大和繪系統によく描かれてゐる自然に興味を持つものでありますが、なるほど、その山川の景は寫實には遠いものでせう。しかし、私は、そこに自然陶醉の態度こそ感ずれ、自然を人の力で改めようなどといふ企圖を信ずることは出來ないのです。しかし、それは決して自然のそのまゝの姿ではないではないかと反問される人があるならば、私は、これだけの事は申さねばなりません。さうです、われらの祖先は大自然をそのまゝにうけいれ得なかつた。自然の中のもつとも優美幽妙な一片をはしよつてきてこれを愛玩したと。それは、さながら、平安朝時代の人々が、他人への贈物には、必ず、季節の花を手折つて

精髓

三昧

白樂天

唐の詩人、西暦八四六年歿、年七十五。

月花をば

徒然草、第百三十七段。

國文學の本質

齋藤清衛著、國文學に現れた日本國民の文學生活の諸相を主旨とせる研究論、大正十三年（一九二四）七月刊行。

その枝に贈物をかけ、乃至、その筥に花を結びつけた心理に相當する。さらに、現代の多くの家庭に、植物の枝葉を生花にする――その植物の愛し方であると申し述べたいのであります。眼前のものそのものを觀賞するより、自然の精髓の一端によつて、自然を直觀し三昧に耽らうとするためではありますまいか。即ち、白樂天の申したやうに、行かないでも、心によつて岩窟にも入れば海浦にも遊ぶ、といふ境地であります。こゝに至つて、私は、兼好法師の名言を聯想せざるを得ません。「月花をばさのみ目にて見るものかは。」自然の外形を、官能を通じてのみ愛してゐる人は、到底盆石美・庭園美・生花の美は感得出來難いでせう。まことに、全心的に自然を愛し、自然に陶醉して來たところに、わが自然文學もあり得ました。

（國文學の本質）

契沖

名は空心、俗姓下川氏、大阪淀津圓珠庵に住す、僧、國學者、元祿十四年（一三六一）寂、年六十二、漫吟集はその歌集。

荷田春滿

羽倉氏、初の名は信盛、伏見稲荷山神官、國學者、眞淵の師、元文元年（一三九六）歿、年六十八、春葉集はその歌集。

賀茂眞淵

岡部氏、通稱衞士、家を縣居と號す、遠江（靜岡縣）の人、國學者、宣長等の師、明和六年（一四三九）歿、年七十三、賀茂翁家集は、その歌文集。

一七 近世短歌抄

圓珠庵契沖

もしほやく難波の浦の八重霞ひとへはあまのしわざなりけり（海邊霞―漫吟集）

荷田春滿

見るふみはのこり多くも年くれてわがよ更けゆく窓のともし火（歳暮―春葉集）

賀茂眞淵

にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつつをれば月かたぶきぬ（九月十三夜縣居にて―賀茂翁家集）

信濃なるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな（嵐―同右）

楫取魚彦（かとりなひこ）
伊藤氏、下總（千葉縣）の人、國學者、眞淵の弟子、天明二年（一七八二）歿、年六十、楫取魚彦集はその歌集。

高千穗の嶽
天孫降臨の聖地といふ、霧島火山脈中の主峯、海拔約一五四七米。

田安宗武
本姓德川氏、德川吉宗の第二子、權中納言、歌人、明和八年（一七七一）薨、年五十七、天降言（あもりごと）はその歌集。

油谷倭文子
名は志豆子、歌人賀茂眞淵に學ぶ、縣門三才女、寶曆二年（一七五二）歿、年二十。

皇神（すめらぎ）のあもりましける日向なる高千穗の嶽やまづ霞むらむ　（春の始の歌—楫取魚彦集）　楫取魚彦

天の原ふきすさみける秋風にはしる雲あればたゆたふ雲あり　（雲を—同右）　田安宗武

楯並めてとよみあひにしもののふの小手指原は今はさびしも　（天降言）

わが宿のそがひに立てる檀の木にかし鳥來啼くころはは早來ぬ　（檀鳥—同右）　油谷倭文子

片山の蔦はふ道をわけくれば いはほも秋になりにけるかな　（又こと秋に—散のこり）

加藤千蔭
橘氏、朮園、芳宜園と號す、春海と共に眞淵門下の双璧、歌人、國學者、文化五年（一八〇八）歿、年七十四、うけらが花はその歌集。

村田春海
號は琴後翁、江戸の人、國學者、歌人、文化八年（一八一一）歿、年六十六、琴後集（ことのちのしゅう）はその歌集。

本居宣長
鈴廼舍と號す、伊勢（三重縣）松坂町の人、歌人、國學者、享和元年（一八〇一）歿、年七十二、鈴屋集はその歌集。

竹の下道
足柄の西麓、靜岡縣駿東郡足柄村に當る。

荷田蒼生子（たみこ）
民子（もかこ）と號す、在滿の妹、春滿の姪、國學者、天明六年（一七八六）歿、年六十五、杉のしづ枝はその歌集。

隅田河簑きてくだす筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ　（霞中春雨—うけらが花）　加藤千蔭

心あてに見し白雲はふもとにておもはぬ空にはるる富士のね　（富士の山に雲のはるるを見て—琴後集）　村田春海

あしがらや空ははれゆく山風につもる雪ちる竹の下道　（關路の雪—鈴屋集）　本居宣長

夕風のをすのゆらぎにそこはかと亂るる玉は螢なるらし　（前栽に螢とぶを—杉のしづ枝）　荷田蒼生子

小澤蘆庵
小澤玄仲、通稱帶刀、別號觀荷堂、尾張(愛知縣)鳴川藩の家老の家に生まる、京都に住まふ、歌人、享和元年(一八〇一)歿、年七十九、六帖詠草はその歌集。

上田秋成
本名東作、秋成は字、攝津曾根崎(大阪市)の人、國學者、歌人、文化六年(一八〇九)歿、年七十六、藤簍冊子はその歌文集。

高圓
奈良市、春日山南方の山。

香川景樹
桂園と號す、因幡(鳥取縣)の人、歌人、天保十四年(一八四三)歿、年七十六、桂園一枝はその歌集。

熊谷直好
始の名信實、周防國(山口縣)岩國の人、歌人、文久二年(一八六二)歿、年八十一、浦の汐貝はその歌集。

きのふまであやしきみねと見し雲も棚引きそめて秋風ぞ吹く　(しら雲のたな引きたるくれに—六帖詠草)　小澤蘆庵

高圓の野べ見に來れば新草にふる草まじりうぐひす鳴くも　(鶯—藤簍冊子)　上田秋成

風わたる水のおもだか影見えて山さはがくれ飛ぶほたるかな　(螢照水草—桂園一枝)　香川景樹

春雨の雲はれがたになりぬらし松の音たかく風たちにけり　(春風—浦の汐貝)　熊谷直好

木下幸文
亮々舍などと號す、備中國(岡山縣)の人、歌人、文政四年(一八二一)歿、年四十三、亮々遺稿はその歌文集。

清水濱臣
泊洒舍などと號す、江戸の人、歌人、國學者、文政七年(一八二四)歿、年四十九、泊洒舍集はその歌文集。

高安
大阪府中河内郡。

良寛
俗姓山本榮藏、越後國(新潟縣)の人、禪僧、歌人、天保二年(一八三一)寂、年七十五、良寛歌集はその歌集。

平賀元義
備前(岡山縣)岡山の人、歌人、國學者、慶應元年(一八六五)歿、年六十六、平賀元義集はその歌集。

さみだれの雫にぬれて我くれば栗の花ちるやまかげの道　(五月雨—亮々遺稿)　木下幸文

河内女が絲くるわざのいとまあれや衣うつなり高安のさと　(名所擣衣—泊洒舍集)　清水濱臣

鉢の子に堇たんぽぽこきまぜてみよの佛にたてまつりてむ　(良寛歌集)　良寛

牛飼の子らに食はせと天地の神の盛りおける麥飯の山　(平賀元義集)　平賀元義

井手曙覽
本姓橘氏、志濃夫廼舍と號す、明治元年(一八六四)歿、年五十七、志廼夫舍歌集はその歌集。

大隈言道
本姓清原氏、萍堂と號す、福岡の人、歌人、明治元年(一八六四)歿、年七十一、草徑集はその歌集。

太田垣蓮月
本名太田垣誠、京都の人、歌人、明治八年(一八七五)歿、年八十五、あまの刈藻はその歌文集。

井手曙覽

賤が家はひりせばめて物植うる畑のめぐりのほほづきの色　（志濃夫廼舍歌集）

大隈言道

風吹けば空なる星もともしびの動くがごとくひかる夜半かな　（草徑集）

太田垣蓮月

山里は松のこゑのみ聞きなれて風吹かぬ日はさびしかりけり　（花のころ旅にありて―あまの刈藻）

源信僧都
惠心僧都、天台宗の高僧、横川に隱れ、往生要集其の他を著し、淨土の信仰を勸めた、寛仁元年(一〇一七)寂、年七十六。

横川
東塔・西塔と共に比叡山三塔の一、横川谷の北の地。

三條の大后の宮
冷泉天皇の后、名は昌子。

八講
妙法蓮華經八卷を八回に分けて講ずるをいふ。

なし閑ゆ

一八　源信僧都の母

今は昔、横川の源信僧都は大和國葛下郡の人なり。幼くして比叡の山に登りて、學問してやんごとなき學生になりにければ、三條の大后の宮の御八講に召されにけり。八講畢つて後、給はりたりける捧物の物ども少し分けて、大和國にある母の許に、「かくなむ后の宮の御八講に參りて給はりたる。始めたる物なれば、先づ見せ奉るなり。」とて遣はしければ、母の返事にいはく、「遣はせ給へる物どもは喜びて給はりぬ。かくやんごとなき學生になり給へるは限無く喜び申す。但し、かやうの御八講に參りなどしてあるき給ふは、法師になし聞えし本意にはあらず。そこにはめでたく思はるらめども、嫗の心に

そこ

元服

多武峯の聖人　增賀聖のこと、初め叡山の慈慧僧正に從つて天台の學を研いたが、後名利を厭うて大和國多武峯に隱れ、高德の一生を送つた、長保五年（一〇〇三）寂、年八十七。

僧都　僧官の一、僧官に僧正・僧都・律師とある。

名僧す宮ばら

は違ひにたり。　嫗の思ひし事は、女子はあまたあれども、男子はそこ一人なり。　それを元服をもせしめずして比叡の山に上げければ、學問して、身の才よくありて、多武峯の聖人の樣に貴くて、嫗の後世をも救ひ給へと思ひしなり。　それに、かく名僧にて花やかにあるき給はんは、本意に違ふ事なり。　我年老いぬ。　生きたらむ程に、聖人にして在せむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか。」と書きたり。　僧都これを披き見るまゝに涙を流して、泣く〳〵　卽ち又返事を遣はしていはく、「源信は更に名僧せむの心無し。　只尼君の生き給へる時、此の如くやんごとなき宮ばらの御八講などに參りて、聞かせ奉らむと思ふ心深くして急ぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めて哀に悲しくて嬉しく思ひ奉る。　然れば、仰に隨ひて山籠り

落居る

ゆめ〳〵

あからさまに

を始めて、聖人にならむ。　今はあはむと仰せられむ時にぞ參るべき。　然らざらむ限は、山を出づべからず。　但し、母と申せども、極めたる善人にこそ在しましけれ。」と書きて遣りつ。　其の返事にいはく、「今なむ胸落居て、冥途も安く覺ゆる。　返す返す嬉しく思ひ聞ゆ。　ゆめ〳〵　愚に在すべからず。」と。　僧都これを見て、此の二度の返事を法文の中に卷置きて、時々取出して見つゝぞ泣きける。

かく山に籠りて六年は過ぎぬ。　七年といふ年の春、母の許に言ひ遣はしていはく、「六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねば戀しくや思し召す。　然らばあからさまに詣でむ。」と。　返事にいはく、「現に戀しくは思ひ聞ゆれども、見聞えむにやは罪は滅びむずる。　尙山籠りにて在せむを聞かむの

みぞ嬉しかるべき。これより申さざらむ限は、出て給ふべからず。」と。僧都これを見て、「此の尼君は只人にも無き人なりけり。世の人の母はかく言ひてむや。」と思ひて過す程に九年になりぬ。

告げざらむ限は來るべからずと言ひ遣はせたりしかども、恠しく心細く思ひて、母の俄に戀しくおぼえければ、若し尼君のうせ給ふべき尅の近くなりにたるか、又我が死ぬべきにやあらむ、とあはれにおぼえて、さはれ來るべからずとはのたまひしかども、詣でむと思ひて出立ちて行くに、大和國に入りて、道に男、文を持ちて逢へり。僧都「いづくへ行く人ぞ。」と問へば、男のいはく、「然々の尼君の、横川に在する子の御房の許へ遣はす文なり。」といへば、「しか言ふは我なり。」といひて、文を取りて、馬

尅—剋
さはれ
御房

に乘りながら行く〳〵披きて見れば、尼君の手にはあらで、賤しの樣に書かれたり。胸塞がりて、如何なる事のあるにかとおぼえて讀めば、「日來何とも無く、風の發りたるかと思ひつるに、年の高きけにやあらむ、此の二三日弱くて、力なくおぼゆるなり。申さざらむ限は出で給ふべからずとは心强く聞えしかども、限の尅になりぬれば、今一度見たてまつらでや止みなむずらむと思ふに、限無く戀しくおぼえ給へば申すなり。疾く疾く在せ。」と書きたるを見るに、恠しく心にかくおぼえつるは、かくありければにこそありけれ。親子の契はあはれなる事とはいひながら、佛の道にあながちに勸め入れ給ふ母なれば、かくはおぼえけるなりけり、と思ひつゞくるに、涙雨の如く落ちて、弟子なる學生ども二三人ばかり具したりければ、それ

け
あながちに

無下に

氣

等にも、「かゝる事のありければなりけり。」といひて、馬を早めて行きければ、日暮にぞ行着きたりける。

急ぎ寄りて見れば、無下に弱くなりてたのもしげも無し。僧都「かくなむ詣で來たる。」と高やかにいへば、尼君「いかで疾くは在しつるぞ。今朝曉にこそ人は出し立ちつれ。」と。僧都のいはく、「かく在しければにや、近來戀しくおぼえ給ひつれば參りつる程に、道にして使は逢ひたりつる。」と。尼君これを聞きて、「あな嬉し。死の尅には逢ひ給ふまじきにや、とこそ思ひつるに、かく在し逢ひたる事、契深くあはれにもありけるかな。」と氣の下にいへば、僧都のいはく、「念佛は申し給ふや。」と。尼君「心には申さんと思へども力無きに、合はせて勸むる人の無きなり。」といへば、僧都、貴き事どもを言聞かせつゝ念佛を勸むれば、

懃に

道心

機緣

善知識

今昔物語

三十一卷、一名宇治大納言物語、宇治大納言源隆國の編著、天竺・震旦・本朝の三部に分かち、國文で書かれた説話集では最古のもの、平安朝末期の製作。

尼君懃に道心を發して、念佛を一二百遍ばかり唱ふる程に、曉方になりて消入る樣にて失せぬれば、僧都のいはく、「我來らざらましかば、尼君の臨終はかくは無からまし。我、親子の機緣深くして、來りあひて念佛を勸めて、道心を發して念佛を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑無し。況んや我を聖の道に勸め入れ給へる志に依つて、かく終は貴く失せ給ふなり。然れば、親は子の爲、子は親の爲に、限無かりける善知識かな。」といひてぞ、僧都涙を流して泣きける。其の後七々日の法事を慥に修し畢りて、弟子引具して横川には歸りたりける。

横川の聖人達も是を聞きて、「あはれなりける親子の契なり。」といひてぞ、泣く〳〵貴びけるとなむ、語り傳へたるとや。

（今昔物語）

吉田松陰
名は矩方、通稱寅次郎、本姓は杉氏、吉田氏を繼ぐ、長門國（山口縣）萩藩士、安政六年（一八五九）刑死、年三十。

妹
松陰の長妹千代。

御洗米

精進

晦日

靈神樣
松陰の實家杉氏の祖先の靈。

一九　妹に與ふ

吉田松陰

この間は御文下され、觀音樣の御洗米三日のうち精進にて戴き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進潔齋などは隨分心のかたまり候ものにて、よろしき事と存候に付、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少少志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず、その間一度靈神樣御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむつかしき事にもこれなく、御深切のことに候へば、相果したく存候へども、當所にては、當り前の精進の外にまた精進と申候はば、連中または番人ども何故かと怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候事面倒に

委細

法華經
妙法蓮華經、一部八卷、二十八品、佛の敎の趣くところは佛と人との一致であることを說く、第二十五の卷普門品といつてゐるのは、觀世音菩薩普門品のこと、略して觀音經ともいふ。

江戸の人屋
傳馬町の獄。

存候。八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に戴き申候。抑「觀音樣信仰せよ。」との事は、定めて禍をよけ候ためなるべく、これには大きに論ある事に候へば、委細申進ずべく候。

吉田松陰

法華經第二十五の卷普門品と申す篇に、悉く觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目に懸り候とも忽ち繩がぶつ〳〵と切れ、人屋に捕らはれ候とも忽ち錠・鍵が外れ、首の座に直り候とも忽ち刀が千々に折れるなど申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋に

大乘
小乘
下根
上根

頓着なし
退轉す

て、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難きことはないとて信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕掛にて、大乘・小乘と二つに分かちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば、觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰さするに御座候。これは人に信を起さするためなり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念・他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候てもちつとも頓著はなく、縄目も人屋も首の座も平氣になれ候から、世の中にいかに難題・苦患の候ても、それに退轉して、不

忠・不孝・無禮・無道など仕る氣遣はなし。されど、初から凡夫に一心不亂ぢやの、不退轉ぢやのと申聞かせても、さつぱり耳に入らぬものゆゑに、假に觀音樣を拵へて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。これに就いて、法華經に都上りの譬これあり、至極面白く候へども事長ければ略し申候。

さてまた、大乘と申候は、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候ても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時から感の強き人にて、老人を見ては我が身も往く先は老人にならうかと悲しみ、死人を見ては我が身も往く先は死なうかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲

しみを起し、是非に生老病死がこの世の習なれば、この世を出ねば濟まぬと志を立て候て、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をなされ候。これにも色々有難話があれども事長ければ略す。さ候て、三十出山とて、僅か五年の間に、生老病死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それから世の人を教化せられたり。これが出世法に候。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは卽ちこの世の人を濟度する事に御座候。

濟度す

さて、その死なぬと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方々は、今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば有難がりもし恐れもするなり。果して死なぬではなきか。孔子の教も事長し、略す。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前に申す觀音經の通では御座らぬか。楠木正成公ぢやの大石良雄ぢやのと申す人々は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居られ候。卽ち刀の千々に折れたる證據にて候。

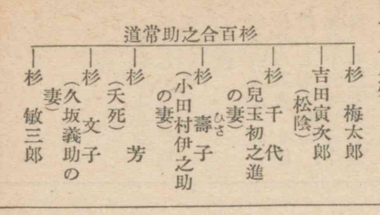
楠木正成
吉野朝の大忠臣、延元元年（一九六）戰死、年四十三。

大石良雄
通稱内藏助、淺野長矩の家老、赤穗四十七士の頭領、元祿十五年（一三六三）歿、年四十五。

禍福は繩の如し
史記南越傳にある文句。

塞翁が馬
淮南子の人間訓に出てゐる故事。

さてまた「禍福は繩の如し。」といふ事を御悟りが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。「人間萬事塞翁が馬。」に御座候。このわけは物識に問うて知るべし。拙者なんど人屋にて死に候はば禍のやうなものに候へども、また一方には學問も出來、己のため人のため、後の世へも殘り、且死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もない事



に候。人屋を出て候はば、いかなる禍の來ようやら知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀さへすれば、先の福があるなり。何の效驗もないことに、觀音に賴みて福を求むるやうの事は、必ず〳〵無益に存候。

尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分とも御存じあらむ。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いに嫌ふなり。お互に七人兄弟中に、拙者は罪人、芳は夭折、敏は啞、ぶざまの惡いやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄樣・そもじ・小田村は、兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見較べよ。これ

小田村
小田村伊之助、後の男爵桂取素彥、藩の儒官。（系圖參照）

御役
常道は治獄吏、民治は藩學助教。

山宅
杉常道隱棲の地、萩城の東方護國山の麓にあつた。

ほどにも參らぬ家は多いもの、近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟內にはぶざまの惡い人も隨分あるもの。然れば、父母兄弟の代りに、拙者・芳・敏の三人が禍を輕うしたと御思ひ候はば、父母樣の御心も濟める譯にては候はずや。且、杉は隨分多福の家なれば、拙者の身上よりは、却つて杉が氣遣なものならずや。拙者身上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれど、杉は今では御父子も御役にて、何も不足のない中なれば、子供等がいつもこのやうなものと思うて、昔山宅にて父樣母樣の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても、眞とは思はぬほどなれば、この先五十年七十年の事を篤と手を組んで案じて見やれ、氣遣なも

小太郎
兄梅太郎の長子、松陰の歿後は吉田家を嗣いだ。

久坂
通稱義助、號は玄瑞、勤王家、元治元年（一八六四）歿、年二十六。（系圖參照）

のに候はずや。去年も端午の容の多いのに、人はめでたしめでたしと嬉しき顏すれど、拙者はどうも先の先が氣遣でたまらぬ故、始終稽古場に屆んで、人の知らぬ處では獨り落涙したるほどのことなり。若しや萬一、小太郎でも父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し〳〵。父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村でさへ山宅のことはよくは覺ゆまじ。まして久坂なんどは、なほ以ての事。されば、拙者の氣遣に觀音樣を念ずるよりは、兄弟・甥・姪の間に「樂が苦の種、福は禍の本。」と申す事を篤と申して聞かせる方が肝要に候。そしてまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟內に一人でもぶざまの惡き人あれば、あとの兄弟は自然

勘辨
心學本
十三日
安政六年（一八五九）四月十三日、松陰は萩の野山の獄から妹千代にこの書簡を認めたのである。

吉田松陰書簡集
廣瀨豐編、松陰が二十一歲から三十歲に至る書簡中、百通を集む、昭和十二年（一九三七）四月刊行。

と心が和いで、孝行でもするやうになり、兄弟もむつまじくなるものに候。これからは、拙者は、兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父母へ孝行してくれられ度候。さうあれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父母樣の御仕合はせ、また子供が見習ひ候はば子孫のため、これほどめでたきことはなきに候はずや。よく〳〵御勘辨候て、小田村・久坂なんどへもこの文御見せ。佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬ樣に、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に「のどけさよ願なき身の神詣で。」神へ願ふよりは、身で行ふが宜しく候。十三日したゝむ。

申したき事中々盡き申さぬが、先づ九枚で置申候。

（吉田松陰書簡集）

平泉　澄
福井縣の人、歴史學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十八年（一八九五）生。

安　政
孝明天皇の御代の年號、（一八五四―一八六〇）。

橋本景岳
名は左内、越前國（福井縣）の人、江戸時代後期の志士、安政六年歿、年二十六。

拔擢重用する
徴々たる
時務策
辭避する
明斷果決

二〇　景岳・雲濱・闇齋

平泉　澄

安政三年四月「拔擢重用するから歸國せよ。」との内命を受けた橋本景岳は、當年僅かに二十三歳、位置をいへば徴々たる一御書院番に過ぎなかつたにも拘らず、必ずしも此の拔擢の藩命を喜ばず、却つて重臣の方針と決意とを反問し、審に國是論・時務策を述べ「若し重臣に此の説を容れ之を斷行する決意がありますれば、朝に命を蒙つて夕に上途し、如何なる難任・重責でも辭避しません。臣子の職、國家に忠節を致すほど結構なことはありませんから、一身の利害は論じない所でありますが、併しながら、重臣の間に明斷果決がなく、徒に議論に日を暮らして歎息しをるばかりでありますならば、その話相手とな

違命

砥礪

ることは好みません。願はくは私を除外せられたく、歸國の意志は毛頭ありません。違命の段は恐れ入る所でありますが、本心を枉げて利勢に附き、權門の機嫌を取り、重臣に調子を合はせる職には任命される覺がありません。大丈夫の憂へる所は國家の安危で、擇ぶ所は義の至當と不當とだけで、その他は論じない所であります。」と答へた。

弱冠二十三歳、徴々たる一御書院番で、而も拔擢の恩命に預りながら、昂然として重臣に質す痛快の態度は、偏に一身を以て國家に捧げ、進退總べて義に依らうとする平生の用心砥礪から出て來たもので、出處利に依らず、只義の至當に就かうとする好箇の一例を、我等は近くこゝに見るのである。然るに、此の精神は突然に現れたものではなく、遙に之が先をなし之

天保　仁孝天皇の御代の年號、（一八四九―一八五〇）。

弘化　仁孝・孝明兩天皇の御代の年號、（一八四―一八五〇）。

梅田雲濱　名は源次郎、若狹國（福井縣）の人、江戸時代後期の勤王家、安政六年（一八五九）歿、年四十四。

抱關・擊柝

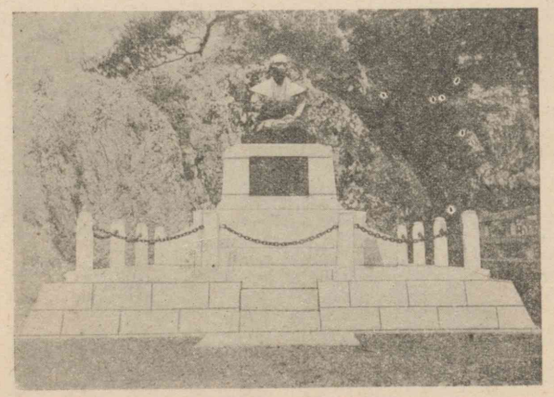
を導いたものがある。

天保十四年の冬か、明くる弘化元年のことであらうが、京都所司代酒井若狹守忠義は、同藩出身の梅田雲濱が京都に在つて望楠軒の講主となり子弟を教育しつゝあるのを聞き、使者を遣はして之を召し書を講ぜしめようとした。雲濱は終生貧窮で、「妻は病牀に臥し兒は飢に泣く。」の句が、今に惻々として人の心を傷ましめるのであるが、その窮乏の中に在つて志氣は毫も撓まず、酒井若狹守の態度の傲慢なのを見て、その召命を辭し、「侯若し藩士として私を用ひられようとするならば、抱關・擊柝でも謹んで命を奉じ、以て先祖以來の御恩を報いたいと存じますが、若し私によつて誠に道を聞かうと希望せられるならば、須く禮儀を以てせらるべきであります。師が重く

石津灌園　名は發、京都の人、漢學者、明治二十四年（一八九一）歿、年四十九。

嘉永　孝明天皇の御代の年號、（一八四八―一八五四）。

て道が始めて重いのであります。私は輕輩ではありますが、道を負ふものであります。身は屈しても道は屈することが出來ません。」と答へ、使者の往返が三度に及んだけれども、雲濱は「斯くの如くにして往きましても、これ侯に益がなく、私に失があります。」と言つて、飽くまで之を固辭してしまつた。石津灌園の梅處士傳略には、之を安政三・四年のこととしてあるが、酒井若狹守の京都所司代となつた時を考へるに、前に天保十四年に任じて嘉永三年



梅田雲濱像

西川正義
名は耕藏、京都の人、江戸時代後期の勤王家、慶應元年(一八六五)歿、年四十三。

に止め、後に安政五年六月に任じて、九月に雲濱の就縛となつたので、安政三・四年には酒井若狭守は所司代でなく、その再任は就縛の三月前であつて事情が叶はず、上述の逸話は、之を初任の時卽ち天保十四年の暮か弘化元年の事とすべきであらう。殊に西川正義の梅田先生行狀が、之を以て雲濱が大津から京都に移つた直後のことにしてゐる以上、これは信用して宜しいと思はれる。然らば、當時雲濱は二十九歲若しくは三十歲、名のまだ聞えない窮士でありながら、道を重んじて出處を苟もしなかつたことは、誠に驚くべきものがある。

進退を一身の利害によつて決せず、專ら義の推すところに從はうとする態度、我等はこゝに重ねて適例を見得た。而もこれまた雲濱に始らず、その先をなし之を導いたものがある。

山崎闇齋
名は嘉、京都の人、江戸時代前期の儒者、天和二年(一六八二)歿、年六十五。

井上正利
常陸國(茨城縣)笠間城主、江戸幕府の寺社奉行、延寶三年(一六七五)歿、年七十。

卽ち我等は是等と殆ど同樣の態度を遠く遡つて山崎闇齋先生に見るのである。

山崎闇齋

闇齋先生が始めて江戸に赴かれた時、貧寒で書籍を買ふことが出來ず、本屋の隣に間借をし、近隣のよしみによつて本屋から書物を借りては讀んで居られた。その時分、井上河內守正利が學問を好み、本屋は侯の邸へ出入りしてゐた。或日、侯から、「誰ぞ師範となるべき人を知つてゐるならば推薦してくれよ。」と賴まれたので、本屋は「この頃京都から參りました山崎嘉右衞門といふ儒

者が私の隣に住んで居りますが、どうも並々の學者とは違つて、優れたところがあると思ひます。之を御採用下されますならば、本人は非常に喜ぶことでございませう。」と申したので、「然らば連れて來よ。」とのことで、本屋は早速この旨を闇齋先生に告げると、先生は毅然として之に答へて、「侯が若し道を問はうと思はれるならば、御自身先づこちらへ來られるが宜しからう。自分の方から參邸することはお斷りする。」と言はれたので、本屋は呆れて、世間知らずの我儘者と思ひ、推薦を取消す氣になつてしまつた。後日侯から「先日の話はどうなつたか。」と尋ねられたので、右の次第を詳しく述べて、「あれは少し氣が變でありますから、誰か別人を御採用いたゞきたい。」と申上げると、侯は深く感歎して、「それこそ本當に師とすべき人物である。」と言つて、即日闇齋先生を訪問せられたといふ。

右の話は原念齋の先哲叢談にも見え、また細野要齋の闇齋先生行狀圖解にも載せてあつて、世に廣く知られてゐる。但し、後書に「此の事、井上侯京都所司代にて在京の時のことなりともいふ。未だ孰れか是なるを知らず。」と疑を存してゐるが、井上河内守正利は寺社奉行にはなつたが、京都所司代に任ぜられたことは曾てなく、それ故に後の說は問題にもならないのである。殊に先生自ら草せられた山崎家譜に、その始めて江戸に出られたのは、明暦四年二月のことであつて、この時井上河内守に仕へたと書いてあり、先生の作られた堯暦序にも、「明暦四年の春、柯、武江に遊び、井上河内守の家に於て、その調ぶる所の堯暦一卷を閲し、一に朱子の考ふる所に據りて以て之

原念齋　名は善、江戸の人、江戸時代後期の儒者、文化三年（一八〇六）歿、年四十七。

先哲叢談　八卷、近世儒者の性行・業績を書いたもの、文化十三年（一八一六）刊行。

細野要齋　名は忠陳、多古屋の人、江戸時代後期の儒者、明治十一年（一八七八）歿、年六十八。

明暦　後西天皇の御代の年號、（一六五五―一六五八）。

柯　山崎闇齋の別名。

朱子　名は熹、支那宋代の大儒、（一一三〇―一二〇〇）。

出處進退

後學龜鑑

闇齋先生と日本精神

平泉澄・内田周平・山本信哉三氏の闇齋と日本精神に關する論文四篇を集む、昭和七年(一九三二)十月。

を成す。」とあるから、かたがた右の話は明暦四年のことに相違ない。明暦四年は卽ち萬治元年であつて、當時先生は四十一歳、學問が漸く深く識見もまた高いといつても、名聲は未だ著聞せず、從つて普通の人々には貧窮の老書生と見えたであらうが、而も道を尊び義を重んじ、五萬石の大名を向かふへ廻して屈せず、出處進退を苟もしない態度は、井上河内守でなくても誠に歎稱する外はない。是こそ、後年――雲濱にあつては百八十餘年後、景岳に在つては二百年後に、是等の後學をして利に迷ふことがなく、直ちに義の當否を檢せしめ、毅然たる態度を持して出處進退を苟もなさしめなかつた龜鑑となつたものである。

(闇齋先生と日本精神)

山鹿素行

通稱甚五左衞門、素行はその號、會津(福島縣)の人、漢學者、兵學家、貞享三年(一六四五)歿、年六十四。

中朝事實

山家素行著、二卷、赤穗(兵庫縣)の淺野藩に謫居中、漢文にて神道と皇道の萬邦に冠絕した所以を論じた書、寛文九年(一六六九)成る。

中國卓爾す

八紘不撓不屈

二 國民性

山鹿素行は、中朝事實に「中國の水土は萬邦に卓爾し、人物は八紘に清秀なり。」と述べてゐるが、まことに我が國の風土は、溫和なる氣候、秀麗なる山川に惠まれ、春花秋葉、四季折々の景色は變化に富み、大八洲國は當初より日本人にとつて快い生活地帶であり、「浦安の國」と呼ばれてゐた。併しながら、時々起る自然の災禍は、國民生活を脅すが如き猛威をふるふこともあるが、それによつて國民が自然を恐れ、自然の前に威壓せられるが如きことはない。災禍は却つて不撓不屈の心を鍛錬する機會となり、更生の力を喚起し、一層國土との親しみを增し、それと一體の念を彌、强くする。西洋神話に見られる如き自

然との闘爭は、我が國の語事（かたりごと）には見られず、この國土は、日本人にとつてはまことに生活の樂土である。「やまと」が漢字で大和と書かれたことも蓋し偶然ではない。

賴山陽の作として人口に膾炙せる今樣に、

花より明くるみ吉野の　春の曙見わたせば
もろこし人も高麗人も　大和心になりぬべし

とあるのは、我が美しき風土が、大和心を育み養つてゐることを示したものである。又、本居宣長が、この「敷島の大和心」を歌つて「朝日に匂ふ山櫻花」といつてゐるのを見ても、如何に日本的情操が日本の風土と結びついてゐるかが知られよう。更に藤田東湖の正氣の歌には、

天地正大の氣、粹然として神州に鍾（あつま）る。

賴山陽　名は襄（のぼる）、字は子成、通稱久太郎、安藝國（廣島縣）竹原の人、漢學者、歴史家、詩人、天保三年（一八三二）歿、年五十三。

人口に膾炙す　本居宣長　一三一頁參照。

藤田東湖　名は彪、水戸藩の人、學者、勤王家、安政二年（一八五五）の大震にて壓死、年五十。

粹然と　神州

秀でては不二の嶽となり、巍々として千秋に聳え、
注いでは大瀛（えい）の水となり、洋々として八州を環る。
發しては萬朶の櫻となり、衆芳與に儔（たぐひ）し難し

とあつて、國土草木が我が精神とその美を競ふ有樣が詠まれてゐる。

かゝる國土と君民和合の家族的國家生活とは、相俟つて明淨正直の國民性を生んだ。即ち、文武天皇御即位の宣命その他に於て、

明き淨き直き誠の心
清き明き正しき直き心

と繰返されてゐる。これは既に、神道に於ける禊祓の精神として語事にもうかゞはれるのであるが、天武天皇の十四年に

巍々と　大瀛　萬朶

文武天皇　第四十二代、御名は珂瑠と申す、御在位十一年、慶雲四年（一七〇七）崩御、御年二十五。

天武天皇　第四十代、御名は大海人と申す、御在位十五年、朱鳥元年（一六八六）崩御、御年五十六。（通說に從ふ）

御制定になつた冠位の名稱には、勤務追進の上に明淨正直の文字が示され、如何にこの國民性が尊重せられたかがわかる。明淨正直は、精神の最も純な力强い正しい姿であつて、所謂眞心であり、まことである。このまことの外部的表現としての行爲態度が勤務追進である。即ち、この冠位の名稱は、明るい爽やかな國民性の表現であり、又國民の生活態度でもあつた。而して、まことを本質とする明淨正直の心は、單なる情操的方面に止らず、明治天皇の御製に、

しきしまの大和心のをゝしさはことある時ぞあらはれにける

と仰せられてある如く、よく義勇奉公の精神として發現する。萬葉集には「海行かば　水漬くかばね　山行かば　草むすかばね　大皇の　邊にこそ死なめ　かへりみはせじ」と歌はれ、蒙古襲來以後は、神國思想が顯著なる發達を遂げて、大和魂として自覺せられた。まことに大和魂は「國祚之永命を祈り、紫極之靖鎭を護り」來つたのであつて、近くは日淸・日露の戰役に於て力强く覺醒せられ、且具現せられた。

海行かば　萬葉集卷十八、大伴家持の歌。

明き淸き心は、主我的・利己的な心を去つて、本源に生き、道に生きる心である。即ち君民一體の肇國以來の道に生きる心である。こゝにすべての私心の穢は去つて、明き正しき心持が生ずる。私を沒して本源に生きる精神は、やがて義勇奉公の心となつて現れ、身を捨てて國に報ずる心となつて現れる。これに反して、己に執し、己がためにのみ計る心は、我が國に於ては、昔より黑き心、穢れたる心といはれ、これを祓ひ、これを去

大祓

ることを努めて來た。我が國の祓は、この穢れた心を祓ひ去つて、清き明き直き本源の心に歸る行事である。それは、神代以來國民の間に廣く行はれて來た行事であつて、大祓の詞に、

かく聞し食してば、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風夕風の吹掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を舳解き放ち、艫解き放ちて、大海原に押放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌以ちて打掃ふ事の如く、遺る罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、高山の末短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀨に坐す瀨織津比咩と云ふ神、大海原に持出でなむ。かく持出で往なば、荒鹽の鹽の八百道の八鹽

道の鹽の八百會に坐す速開都比咩と云ふ神、持ち可可呑みてむ。かく可可呑みてば、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根の國底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國に坐す速佐須良比咩と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へ奉る官官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪は在らじ……

とある。これ我が國の祓の清明にして雄大なる精神を表したものである。國民は常にこの祓によつて、清き明き直き心を維持し發揚して來たのである。

人が自己を中心とする場合には、沒我獻身の心は失はれる。個人本位の世界に於ては、自然に我を主として他を從とし、利

異質

を先にして奉仕を後にする心が生ずる。西洋諸國の國民性、國家生活を形造る根本思想たる個人主義・自由主義等と、我が國のそれとの相違は正にこゝに存する。我が國は肇國以來、清き明き直き心を基として發展して來たのであつて、我が國語・風俗・習慣等も、すべてこゝにその本源を見出すことが出來る。

わが國民性には、この沒我・無私の精神と共に、包容・同化の精神とその働とが力強く現れてゐる。大陸文化の輸入に當つても、己を空しうして支那古典の字句を使用し、その思想を採入れる間に、自ら我が精神がこれを統一し同化してゐる。この異質の文化を輸入しながら、よく我が國獨特のものを生むに至つたことは、全く我が國特殊の偉大なる力である。この

ことは、現代の西洋文化の攝取についても深く鑑みなければならぬ。

抑〻、沒我の精神は、單なる自己の否定ではなく、小なる自己を否定することによつて、大なる眞の自己に生きることである。元來個人は國家より孤立したものではなく、國家の分として各〻分擔するところをもつ個人である。分なるが故に常に國家に歸一するをその本質とし、こゝに沒我の心を生ずる。而して、これと同時に、分なるが故にその特性を重んじ、特性を通じて國家に奉仕する。この特質が沒我の精神と合して他を同化する力を生ずる。沒我・獻身といふも、外國に於けるが如き、國家と個人とを相對的に見て、國家に對して個人を否定することではない。又包容・同化は他の特質を奪ひ、その個性を

失はしむることではなく、よくその短を棄てて長を生かし、特性を特性として、採つて以て我を豐富ならしめることである。こゝに我が國の大いなる力と、我が思想・文化の深さと廣さとを見出すことが出來る。

沒我歸一の精神は、國語にもよく現れてゐる。國語は主語が屢、表面に現れず、敬語がよく發達してゐるといふ特色をもつてゐる。これはものを對立的に見ずして、沒我的・全體的に思考するがためである。而して、外國に於ては、支那・西洋を問はず、敬語の見るべきものは少いが、我が國に於ては、敬語は特に古くより組織的に發達して、よく恭敬の精神を表してゐるのであつて、敬語の發達につれて、主語を表さないことも多くなつて來た。この恭敬の精神は、固より皇室を中心とし、至尊

に對し奉つて己を空しうする心である。おほやけに對するにわたくしの語を以て自稱とし、古くから用ゐられる「たまふ」或は「はべる」「さぶらふ」等の動詞を崇敬・敬讓の助動詞に轉じて用ゐる如きがこれである。而して、この「さぶらふ」「さむらふ」といふ文字から武士の意味の「侍」の語が出たのであり、書簡文に於ける候文の發達となつた。今日用ゐられてゐる「御座います」の如きも、同樣に高貴なる座としての「御座ある」と、「いらつしやる」「御出でになる」といふ意味の「います」から來た「ます」とからなつてゐるのである。

次に風俗・習慣に於ても、我が國民性の特色たる敬神・尊皇・沒我・和等の精神を見ることが出來る。平素の食事も御飯を戴くといひ、初穗を神に捧げ、先づ祖先の靈前に供へた後、一家の

氏上
壽詞
產土
盂蘭盆會

者がこれを祝ふのは、食物は神より賜はつたものであり、それを戴くといふ心持を示してゐる。新年の行事に於て、門松を立て、若水を使ひ、雜煮を祝ふところにも、遠い祖先からの傳統生活がある。賀詞を述べて齡を祝ふのは、古に於ては、氏上が聖壽を祝ひ奉る壽詞の精神につながるものであり、萬歲の稱呼の如きも亦同じ意味の祝言である。

鎭守はもとより、氏神樣といふのは、大體に於て產土の神と考へてよいが、地方的な團體生活の中心をなして今日に及んでゐる。今日の彼岸會や盂蘭盆會の行事は、佛敎のそれと民俗信仰と合したものと思はれ、鎭守の社や寺の境內で行はれる盆踊について見ても、農村娛樂の間にこの兩系統の信仰の融合統一が見られる。農事に關しては、豐年を祝ふ心、和合共

有職故實

榮の精神、祖先崇拜の現れ等をうかゞふことが出來、同時に我が舞踊に多い輪をどりの形式にも、中心に向かつて統一せられる沒我的な特色が出てゐて、西洋の民族舞踊に多い男女對偶の形式に相對してゐる。子供が生まれた時、お宮參りをさせる風習が廣く行はれてゐるが、これには氏神に對する古からの心持が現れてゐる。

年中行事には節供の如きものがあり、自然との關係、外來文化の融合調和等が見られるが、更に有職故實等に及んでは、その形の奧に汲出される傳統精神を見逃すことは出來ない。年中行事には、既に擧げたやうに氏族生活の俤を留めるものもあれば、宮廷生活の間から生まれたものもあり、又武家時代に儀式として定められたものもある。いづれもその底には

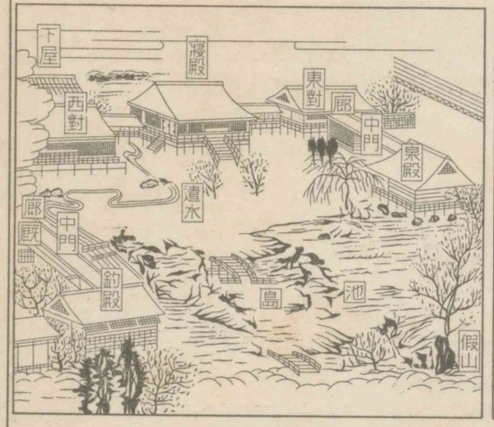
我が傳統の精神が輝いてゐる。雛祭の如きは、最初は祓の行事を主體とし、平安時代の貴族の生活に入つて、ひいなの遊びとなり、娯しみと躾とを併せた儀式的な行事となつた。更にそれが江戸時代になつては、內裏雛を飾り、皇室崇敬の心を託することになつたのである。

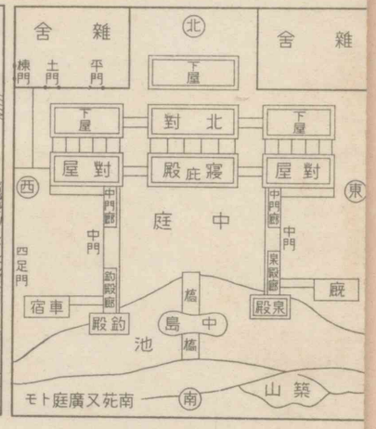
（文部省「國體の本義」）

國體の本義
文部省著、國體を明徵にし、國民精神を涵養せしむるために國體の根本義を解いたもの、昭和十二年（一九三七）三月刊行。

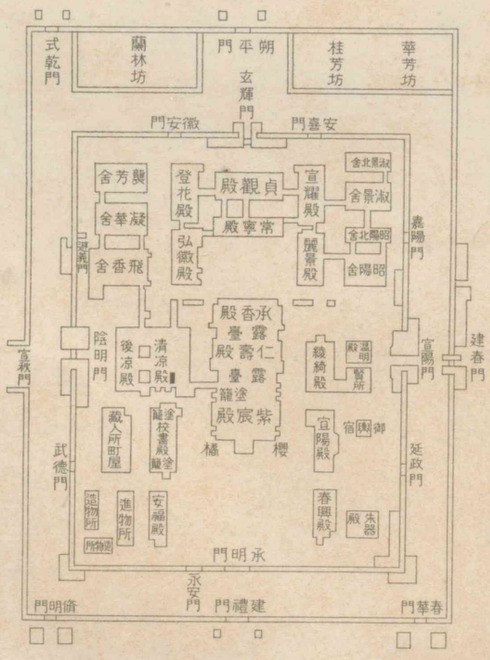
女子新國語讀本　新制版　卷七　終

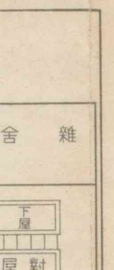
寢殿造

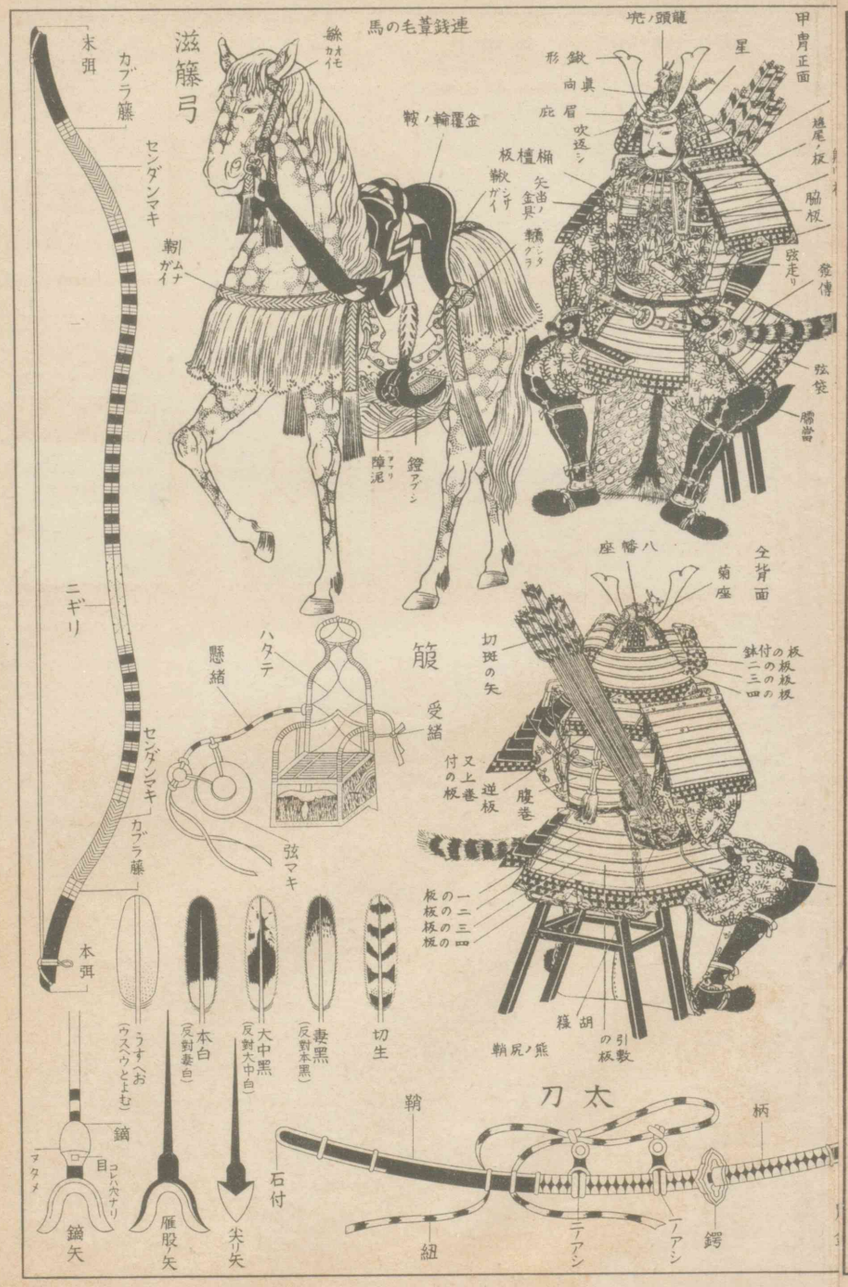




內裡の圖

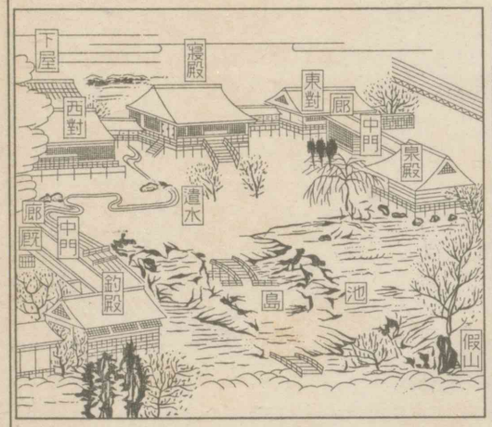


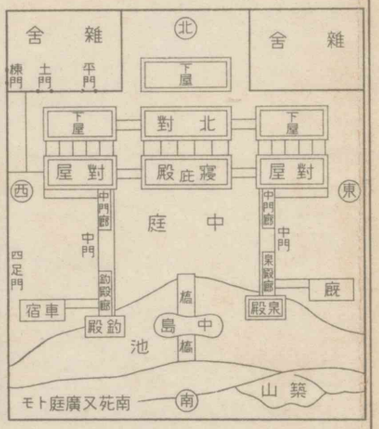


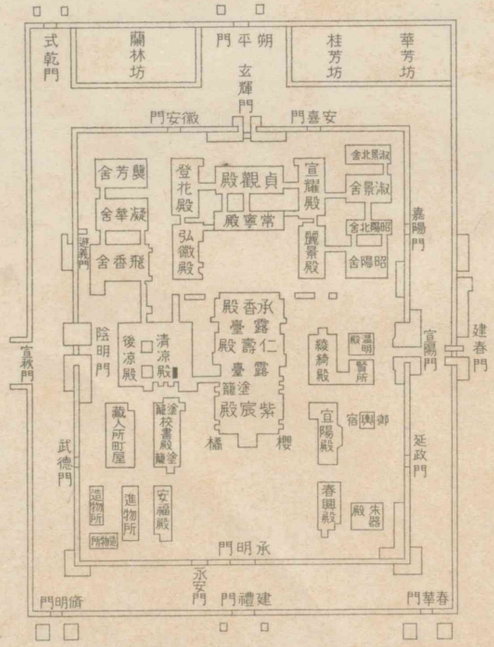


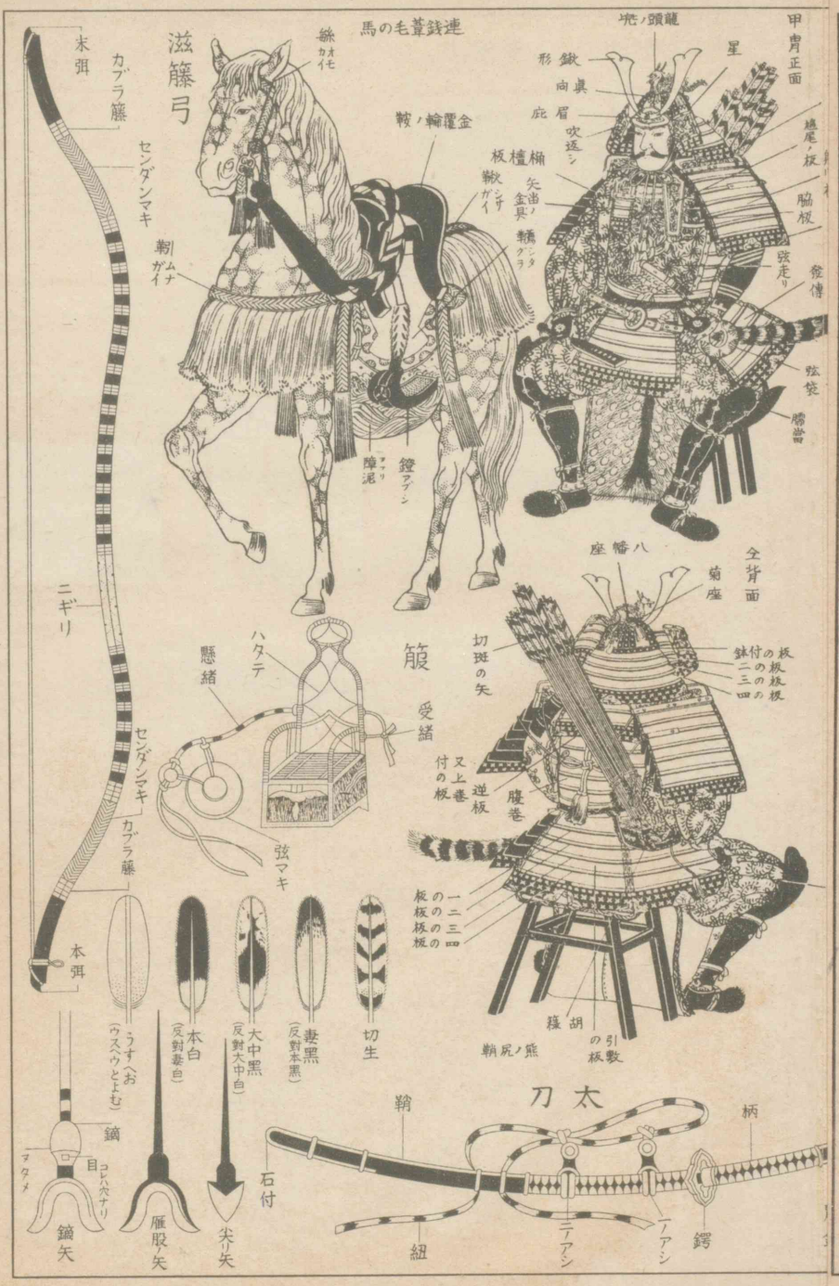
女子新國語讀本 新制版 卷七 終

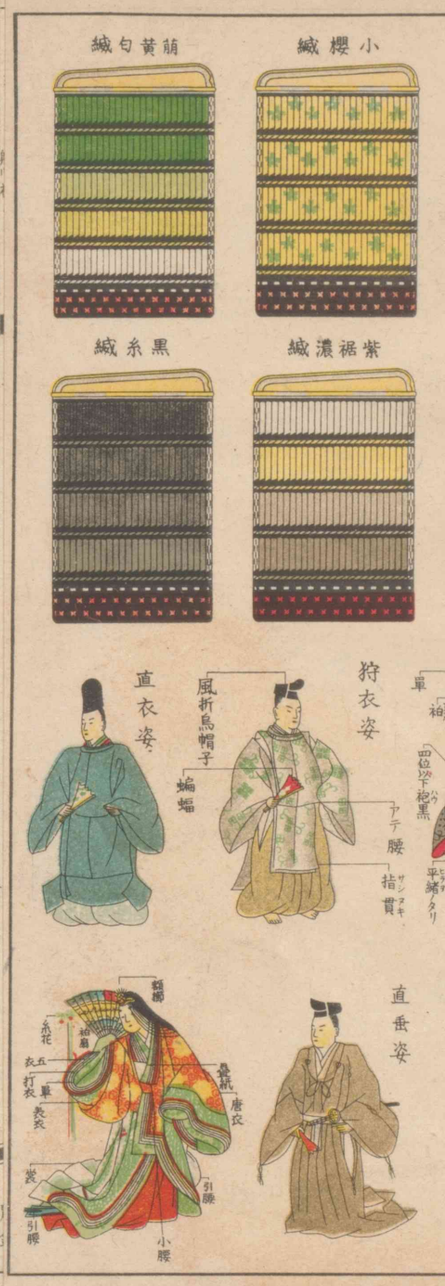
寝殿造


下屋
寝殿
東対
廊
中門
東殿
西対
遣水
廊
中門
釣殿
島
池
假山


雑舎
北
雑舎
棟門
土門
平門
下屋
下屋
北対
下屋
対屋
寝殿
対屋
西
東
中門廊
中門
中門廊
中門
四足門
庭中
宿車
釣殿
橋
島
中
池
橋
東殿
廐
モト庭廣又苑南
南
築山


式乾門
蘭林坊
朔平門
桂芳坊
華芳坊
玄輝門
徽安門
安嘉門
内裡の圖
貞観殿
常寧殿
宣耀殿
登花殿
弘徽殿
麗景殿
承香殿
仁寿殿
紫宸殿
清涼殿
後涼殿
陰明門
宣陽門
建春門
嘉陽門
宣義門
武徳門
延政門
春興殿
安福殿
承明門
建礼門
春華門
朔平門


滋籐弓
末弭
カブラ籐
センダンマキ
ニギリ
センダンマキ
カブラ籐
本弭
連錢葦毛の馬
絲
鞍ノ輪
鞍ノ輪
鞍ノ輪
鐙
障泥
甲冑正面
兜ノ緒
星
鍬形
向眉
庇
吹返シ
板
櫓
矢
金具
鞦
鞦
脇板
弦走リ
弦巻
帽子
全背面
八幡座
菊座
切斑の矢
鉢付の板
逆板
又上巻付の板
腰巻
一二三四の板
一二三四の板
籐
胡
引の数
熊ノ皮ノ鞘
箙
ハタテ
懸緒
受緒
弦マキ
うす（お）（ウスウとよむ）
本白（反對白色）
大中黒（反對大中白）
妻黒（反對本黒）
切生
鏑
目
コヒハ穴ナリ
ヲタメ
鏑矢
雁股矢
尖矢
石付
太刀
鞘
柄
紐
ニアシ
アアシ
鍔


縅黄白
縅櫻
縅糸黒
紫裾濃縅
直衣姿
風折烏帽子
蝙蝠
狩衣姿
アテ腰
指貫
直垂姿
唐衣
引腰
小腰

昭和十二年八月五日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行
昭和十六年七月十三日訂正三版印刷
昭和十六年七月十二日訂正三版發行

女子新國語讀本（新制版）
定價 各金六拾錢

編者 澤瀉久孝
木枝增一

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 大阪市西區阿波座中通二丁目二十三番地
合名會社 交進社印刷所
代表社員 余部留吉

發行所 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町2ノ9

（略名）修文澤瀉女國

沖永澄子

第四學年　三班

沖永澄子

第四學年　第三班

沖永澄子

(10)